
天界ギャング

やった

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天界ギャング

【Nコード】

N8918Z

【作者名】

やった

【あらすじ】

天界のギャングがいろいろする話

・プロローグ

1

「ハツハツハ、おはよう、バカども！」

「バカは君です、桶狭間くん。終業式まるまる遅刻とは何事ですか？」

「お見事です！」

まるで上手いこと言ったかのように振る舞うこの遅刻常習犯を、一言で表すなら『バカ』となる。偏差値三十八の定員割れ高校、宇奈月学園うなつきに通う三年生 名を、桶狭間弾丸おけはまたんまるという。

短い黒髪は、剛毛のためか必要以上に重力に逆らっていた。軽やかに半円を描く眉に悪びれた様子はなく、馬鹿みたいに磨かれた真っ白な歯を大きく教師に見せつけている。

生まれてこの方風邪を引いたことのないダンマルは、ミスター健康の名を欲いままにしていた。『県内屈指のバカ私立』と謳われる宇奈月学園の中であって、その成績は最低ランク。

今日は七月の最終登校日だった。各々に通知表が返されるのだが、宇奈月学園においては留年組が発表される悪夢の日でもある。他の高校に比べると、この学園での死刑宣告は大分早い。

終業式を丸々家で寝て過ごし、通知表返還という大事なシーンの前にしてようやく飛び出してきたダンマルは、それ故に今現在、こうして怒られている。

「で、センセ、俺の通知表は！？ あ、誰か留年したヤツとかいた！？」

まあ、そんなアホなヤツいるはずないかあ、と笑い飛ばすダンマ

ルの表情には一点の陰りもない。教師はそんな彼を見てにっこりと微笑むと、「いいから座りなさい」と静かに諭した。

「丁度、次は君の番だったんですよ。おめでとう、桶狭間くん。試験は過去最高の順位です」

「えっ、まじでか、だよな、ああ、そうだろそうだろ、俺、今回は毎回十五分も起きてたし！」

テンションを上げるダンマル。ちなみにテストは毎回きっちり五十五分で行われている。

「来年もよろしくお願いしますね 留年おめでとう」

「そうだな、来年もよろしく。……………えっ」

通知表に挟まれた真っ赤な紙は、留年に関する同意書である。それがちらついていた。赤さをアピールしていた。そう、彼は今、辛い現実に向直しようとしている。

「留年？」

「留年です」

「おかさあーんっ！」

ダンマルは遙か空の向こう、自宅でクッキーを貪っているであろう主婦に助けを求めた。しかし残念ながらその思いは届かない。届いたところで恐らく叱られるだけである。

「いいんだ、どうせ俺に日本的敏腕なんて存在しないんだ」

基本的人権と言いたかつたらしい。ダンマルは教室の隅っこを占領し、腐り始めた。

すると突然眼鏡をかけた男が、心底嬉しそうな笑顔を浮かべつつ、彼の背中を叩く。

「やったね！ これで来年も甲子園を目指せるな、よっ、留年キヤプテあいたあーっ!？」

足首に噛みついていていた。実はダンマルは野球部のピッチャーで、予選敗退したばかりだった。

「おまつ、ズボンに唾液がつ！ くそう、洗ってやるからな……………ズボンを洗うから待ってる！」

首を洗って待つてろ、と、ズボンを洗いたい、がごつちゃになつていた。

彼の名は羽方政一^{はかたせいいち}。周りからはハカセと呼ばれている。ノンワックスの黒髪はクセのないストレート。大きめの銀縁眼鏡は度が強く、光の反射のせいか、眼鏡の内側は真っ白だった。

「ズボンを洗う前に、今までの自分を洗ってくださいね、羽方くん……君の番ですよ」

先生がコホンと咳をする。まだ通知表返還の途中であり、丁度次はハカセの番だった。

「ふっ……そうですか。ついにこの時が来たんですね。僕のターン！ ドロー！」

くるくるとバレーのように回転しながら教卓に近付いた後、スパーン！ と勢いよく水平に腕を振るう。教師から通知表を奪い取ったハカセは、眼鏡をつり上げながら口元を緩ませる。

「見たまえ、ダンマル！ 僕の通知表には赤紙が入っていない！ 僕の勝ちだ！」

そう高々に宣言するハカセの足元から、教師がゆったりとした動作で赤い紙を拾い上げた。

「君も、来年は頑張りましょうね、羽方くん」

その言葉に、一瞬にして顔が青ざめる。

「……留年？」

「留年です」

「おばあちゃあーんっ！」

ハカセは天国で手を振っているであろう、敬愛して止まない祖母の名を叫んだ。

砕け散ったその心。彼はおもむろに窓を開けると、「さようならスザンヌ」などと意味不明なことを口走った。これまた病的である。現実逃避の手本のようだった。

そこでダンマルが、肩にポンと手を置いた。「ダンマル、お前……」と、ハカセが呟く。

「泣いたっていいんだぜ。泣かない男は肌を舐めてもしよっぱくないって、母さんが言ってた」

「そうだなダンマル……お婆ちゃんも言ってたよ。肌がしょっぱい男は新陳代謝がいいって」

「ハカセ……夕日が……恋しくないか……？」

「そうだなダンマル……今なら僕、空を飛べる気がするよ……屋上から、札幌まで……」

「札幌は……ちょっとキツいんじゃないかな……」

まだ授業も終わっていないというのに、教師を無視して二人は屋上に向かっていく。肩を組み合い、哀愁を漂わせる。途中から国歌の斉唱が始まっていた。

金属的な反響音とともに、最上階の扉が開け放たれる。目映い夕日の光が屋内に差し込んだ。

「あれは……」

雲一つ無く澄み渡る空。灰一色の無機質な庭園。そんな中、二人はとある少女に目を奪われた。クラスのアイドル、ぼわぼわ系美少女のヒナこと菊川雛瀬きくかわひなせが、ニメートル近いフェンスの上に立っていたのだ。清廉な美を兼ね揃えた長髪が、風に撫でられゆるりと流れる。

「可憐だ……」

異常な状況を一切無視して、ダンマルが頬を朱に染めながら言った。それに気付いたのか、ヒナが振り返る。うつすらとした茶色の直毛は腰の辺りにまで届いており、パツチリと開いた大きな双眸はどこか憂いを帯びているようでもあった。子犬のような普段のヒナとは異なり、どこか達観した雰囲気さえ醸し出している。そこで、ハカセが気付いたように声を出した。

「黒！」

パンツの色のことだった。

「なにい！？ あ、黒！」

ダンマルも驚きの表情を浮かべて低い声で唸る。目が自然と細く

なっていた。

「……」

しかし、ヒナはそんな二人を黙殺する。冷やかな表情を保ったまま、視線を前方へ。

彼女の眼前には校庭が広がっていた。軽くジャンプすれば死ねるような、危険な位置。

そこでさすがにおかしいと思ったのか、ダンマルが口を開く。

「おい、ヒナ、そんなところで何を!? まさか……『人がゴミのようだ』ってことか!?」

自殺の線より先にムスカ大佐が浮かんでしまふあたりに、ダンマルの発想レベルが伺えた。

「いや、待てダンマル。様子がおかしい。だってまだ授業中だよ。

つまり、これはサボリだ。あの菊川さんが授業を休んで人ゴミごっこをするなんて考えられん」

ハカセは勝手に人ゴミごっこと略した。言っていること自体は真つ当だ。

「なら一体……」

「分かった……分かったよ! あれは、『ロープ抜きバンジージャンプ』だ!」

サビ抜きサーモンのノリで、犯人はお前だのノリで、ハカセがビシッと答える。

「おい、待て、バンジーってそれ……ひよっとして死ぬんじゃないか……?」

「食い止めるぞダンマル! 菊川さんはロープなしでバンジーが出来る」と勘違いしている!」

二人は頷きあった。二メートル近いフェンスの上で、バランスを取るヒナの元へ 走る。

「おい、ヒナ! ノーロープ! ノーロープ! ロープ大事!」

一方ヒナは、そんな二人に向かって氷のような視線を投げかけながら、静かに呟いた。

「すみません……失せてくれませんか？」

これから、私、自殺するんで。

以上が、桶狭間弾丸が所持する『死ぬ直前の記憶』の全てである。

「ようこそ天界へ！ 君たち三人は、今日より我らの同志です！」

「……天界？」

きよとんとする偏差値三十八の少年。

物語が始まった。とある関東の馬鹿者たちが、荒んだ天界を吹き荒らす そんな物語が。

・プロローグ B

0

千年生きた悪霊を、完全に殺すことは出来ない。

「大黒天^{だいくてん}、貴殿を永久投獄の刑に処す！」

故に、眉もなければ表情もないこの男に、転生死刑が適用されないのは当然のことだった。

悪霊という幻想的な名称ではあるものの、彼らはいくまでも普通の存在である。

人を食らうことはない。異能を行使することもない。ただ不老なだけだった。

「……………そうか。把握した」

大黒天は抑揚もなく返答する。満場一致で有罪となった彼は、世紀の大罪人であった。

「ところで、閻魔は元気が……………？」

「貴殿がそれを聞くのか？」

「……………それもそうだ」

表情は石のように動かない。それから何の抵抗も見せず、あっさりとは彼は投獄された。

撲殺。刺殺。絞殺。圧殺。銃殺。斬殺。

殺害した霊の数は、分かっているだけでおよそ千。

呪い殺すなどというオカルトな方法は、この天界には存在しない。彼はただ純粹に、悪として、卑劣として、畜生として、外道として、力としてこれを為した。

千年の鍛錬は決して彼を裏切らない。老練した魂に、鍛え抜かれた肉体。

ただ銃を向けた方向が、時代に反したただけであった。

「……………一方通行を真つ直ぐ歩けば目的地に辿り着ける。そんな人生にどんな意味がある？」

大黒天は牢獄の最深部にて自問自答を繰り返す。

「他者への衝突を恐れて何になる？ 足並みを揃えることが正義なのか？ 真理なのか？」

違う、と独りごちる。彼の進むべき道は、牢獄の中にあっても変わらない。

「……………ルールは不要。統率は無用。仮に逆行することで千人にぶつかるというのならば、」

オレは躊躇なく、邪魔な千人を斬り捨てると誓おう。

彼は己に誓う。千年生きた者が、最後に辿り着いた境地は究極なる個であった。

この世に神はいない。対等でもない。上下は成立しても横の関係はままならない。

そして、自身より上はいない。

彼のアイデンティティは、そうしたナルシズムに近い思想によって保たれていた。

その数十年後。

彼は牢獄の中より、時代への逆行を開始する。

黒の色を持つ犯罪組織の長　あるいはブラック・ギャングの王たる者として。

「貴方たちは生きた宝くじですよ！ 紅の暦が始まり、ようやく一億人！ 天界日本地区にやって来た天来人の人数なんですけどね、貴方たち三人が同時に一億人目となったワケです。いやはや、三人同時って奇跡ですってコレ！ あ、試験が終わったら閻魔様と記念撮影会をするんで、ご協力お願いしますね。もしかしたら後々取材の嵐かもしれないですよ！」

興奮気味に捲し立てる細目の男。坊主頭が目立っており、白一色の和服が清廉さを醸し出していた。姿勢が良く、見た目はまさに和尚様なのだが、どうにもテンションが高い。

聞き慣れないであろう文字の羅列は、当然のようにダンマルの右耳から左耳へと流れていく。現在、ダンマル、ハカセ、ヒナの三人は、畳の上にそれぞれ自由な姿勢で座っていた。

「ところで、あんた、だれ」

ダンマルは男の話を無視して尋ねる。彼は何故自分がここにいるのか、理解出来ていない。

「マイネーム・イズ・空海くうかい！」

空海と名乗った男は、鼻息を荒くしている。

「そうか、マイネームさんか……」

ダンマルは無意味に数回頷いた後、首を左右へと動かして視界を広げる。

彼の右で律儀に正座をしているハカセは、拳動不審の人と化していた。自慢の眼鏡がカタカタと震えており、貧乏揺すりが止まらないようだった。彼は突然の状況変化に弱い。

一方、その反対側に座すヒナは、至って静かだった。ぼうつと惚けているようでもある。

「ところで、こじ、どじ」

「閻魔宮えんまきゆうですよ！ 現世の日本でいう、内閣政府の本拠地、魔王の

城みたいなもんです！」

「なるほどね」

分かったような顔で頷くダンマルは、八カセとは逆に飲み込みが早い。否、飲み込むことを放棄しているだけである。彼は深く考えないのだ。それが長所でもあり、短所でもある。

そんな彼が胡座をかくこの場所。古き日本の良き時代。そんな印象を与える風流な木造の部屋だった。床は畳、戸は障子。琴の音が響く辺り、無駄に風情がある。

「まったく、なかなか凝ったドツキリだな、憎いぜチクショウ！」
ダンマルが出した答えはそれだった。これはドツキリであるとか心からそう思っている。自らがドツキリを仕掛けられる程の著名人かどうか、なんてことは微塵も考えない。

「その発想に私がドツキリです。じゃなくて、ガチで皆さんは死んじゃったんですよ！」

空海はにつこりと微笑みながら、声を大にして言った。

これを見てくださいと、彼は地味に角に備えられていたテレビを点ける。すると、三人が知らないニュースが放送されていた。「三毛梟連続爆発事件」という題で、女性がマイクを握る。

「三毛梟はこの辺りに位置する、池袋にちなんだ天界都市です。最近では荒れてますよー」

知らない都市、知らない事件、知らない番組、知らないチャンネル。ポカンとする三人は、空海による説明を受けて数分の後、ようやく状況を半分ほど飲み込むに至った。

「というワケで、天界の一員になって頂くにあたり、皆さんにはこれから履歴書記入とテスト回答を行って頂きます！ 結果次第で霊としての階級が決まるので、頑張ってくださいね！ あ、履歴書に嘘とか書いてもバレますんで！ そんなじゃ、あつくん、持ってきてー！」

ウィーン、と障子が自動で開く。その意外性のためか、ダンマルと八カセは口をあんぐりと開けた。その向こう側にある廊下より、

爽やかな男性が紙の束を抱えたまま歩いてくる。

あつくんと呼ばれた男は、どさりと紙の束を脇に置いた後、壁に立てかけてあつた折りたたみ式のちゃぶ台を三つ即座に組み立て、ダンマルたちの目の前に置いた。そして、紙を重ねる。

「それでは、始め！」

三人を置いてけぼりにして、謎のテストが突然に開始された。

「はい、終了です！ ゴッドラック・フォーエヴァー！」
「……？」

空海による適当な終了合図で、ダンマルは目を覚ます。図太い彼はこんな常識外の状況の中でさえ、居眠りをしていた。そんな彼に、ハカセから剣呑とした眼差しが突き刺さる。

ハカセはようやく平常心を取り戻していた。ダンマルが寝ていた間、彼は試験中に「こんなのおかしい、間違っている！ おばあちゃん！」と暴れ出したが、すぐさま鎮圧された。

一方ヒナは、よしっ、と拳を握ってテストに臨んだ。最期の時にあつた冷徹な雰囲気は消え、普段通りのぼわぼわ系に戻っていた。試験の結果に自信があるのか、満足げである。

「よろしいですね？ と空海が三人の顔を見渡した。反対意見が出なかったのを確認して、

「ではでは、採点係に回すのでしばしご歓談ください。あ、私もちよつと出ますので、質問があればこの風乃かざのにお願いしますね！ フーさんチェンジ！」

こうして、謎の試験が終了したのだった。

それと同時に、空海と入れ替わるようにして、小柄な少女が自動障子を超えてくる。小学生くらいの身長で、銀色の髪が肩程まで垂れていた。幼いながらに凜とした顔つきで、髪は後方で五つに結わえられている。結い目は見事なペンタゴンであり、胸は見事なペツタンコだった。

空海同様、雪色に染まった和服をふわりと浮かせながら、少女が

三人に近付く。ダンマルの一メートル手前まで来ると、彼女はドカッと勢いよく座り込んだ。

「ウチは風乃。フーと呼ぶがよい。誇り高き淑女じゃ」

現世の者からすれば妙な口調。しかし彼女、フーにとってはそれが普通だった。

「埃はたき熟女……？ ウソつけ、お前、ガキじゃないか！」

ダンマルは埃を熱心にはたいてまわる熟女を想像したようだ。

「ウチはガキではない！ どあほー！ 子ども扱いするでないぞ！
ウチはあだるとじゃ！」

立ち上がってぴょんぴょん跳ねながら両腕を振り回す様は、どこからどう見ても小学生である。そんなフーに対して、突然ヒナが拳手して質問をする。

「あ、あの、風乃さん！」

「フーじゃ」

「フーさん、あのあの」

ヒナは呼び名を訂正し、言葉が続ける。

「この後、私たちはどうなっちゃうですか？」

どもるその様子からは、緊張の色が伺えた。

「ふむ。そうじゃの。まずは階級の発表、次に閻魔様が死ぬほど楽しみにしておった撮影大会で一時間程度。それが終わり次第、この閻魔宮より離れて貰う手筈じゃ」

「階級か……聞いた感じ、試験の結果によって変化するのだろうか？
通知表みたいなものか？」

ハカセが眼鏡をつり上げながら尋ねる。三人とも夏用制服のままだった。

「遠からずじゃな。天界には五段階の階級があつての。天霊や貴霊などがある。君たちに分かりやすく言えば、武士、商人、農民、えた・ひにんのような身分区別じゃて」

「江田^{えた}避妊……？」

ダンマルが唸った。江田はエロい話が大好きな、彼のクラスメイ

トである。

「まあ、結果が出れば分かるじやろう。ちなみにウチは貴霊、上から二番目の階級じゃ。何もしくとも天啓が手に入る便利な身分じやて……おっと、すまぬ。『天啓』というのは天界の貨幣のようなもの。日本円と連動するように出来ておるのじゃ」

再びダンマルが首を捻る。目をしばしばさせている辺り、何も理解出来ていないのだろう。

「単位は『全』じゃ。百全でナクドマルドのハンバーガーが買える。そう覚えておけばよい」

ダンマルは未だに硬直している。

「えっと、五百全あれば、えっちな本が買えるということだと思いません」

「そういうことか！」

ヒナの例えでようやく理解に至るダンマル。下ネタを駆使するとダンマルは覚えが早い。同じクラスであり、勉強会を何度かともにしたヒナからすれば、それは常識だった。

「まあ、貨幣然り文明然り、この世は現世と大して変わらぬ。現世の会社は大抵こちらにもあるの。ナクドマルドだけでなく、イトトウエルヴもあるぞ。もつとも、やや異なる成長を遂げた側面もあるが、基本的に科学や産業のレベルは現世に近い。違和感を感じるのは、天啓を使ったやりとりくらいじやろうて。ウチらは霊じやが、霊とて腹は空くし眠くもなる」

語り口調で紡ぐ。フーの説明が、ダンマルたちにどれ程届いたかは定かではない。

「そうか……つまり天国ってことだね」

ハカセがかなり適当にまとめた。届いてはいないようだった。

「ということは、死んでも今まで通りなんですかね？」

ヒナは豊満な胸に手をあて、ほっとしたかのように言う。

「ふむ、そもそも正確に言えば、ウチらに死という概念は存在しないのじゃよ。現世を生きた人間は死に、霊となって生活し、そして

転生する。輪廻を繰り返す限り、魂は不死じゃ。人として死ぬことはあるがのう。しかしそれも、魂が消えたワケではない」

既にダンマルは完全に飽きていた。手足を伸ばしてうーうー言っている。

「あ、あの。転生って……？」

ダンマルと違って、ヒナの理解度は早い。偏差値三十八の宇奈月学園において、実のところ彼女はトップクラスの成績であった。勉強会でも、彼女は常に教える立場にある。

「魂を循環させるシステムじゃよ。現世に生まれる器に、魂として現界するということでの。魂は人の世と霊の世を循環するのじゃ」

「転生……元の世界に、戻れるんでしょうか……？」

「うむ。しかし基本的に記憶はなくなる。天啓を貯めておかねば、人間どころか八工辺りに転生するハメになるぞ。それにウチは転生は勧めぬ。ここでの暮らしこそが至上じゃて」

何故？ と首を傾げるヒナ。フーは人差し指を突き立てながら答える。

「ウチら霊なる者は不老。つまり、人を超えた高位なる者じゃ。あえて人に戻ることもなかるう？ ここでは、今までと差し支えない生活が出来るしのう。……凡霊以上であれば、じゃが」

ダンマルがいい加減夢の国へと浸かり始めた。ハカセは分かったフリをして頷くばかりだ。

「ま、それ故に中々個体数が減らないのじゃがな。だからこそ那天啓じゃ。天啓は」

フーがそこまで言いかけたところで、不意に自動障子が開く。ダンマルが現実に戻ってくる。

「はいはい、皆さんの結果が出ましたよ！ 閻魔様から貴重な賞状が頂けます！ 中央閻魔室を解放するので、ついてきてくださいな！ 閻魔様と面会出来るのって、実は天界人生で一回きり、これっきりですので、脳裏に焼き付けておくといいですよ！」

テンション高めに、坊主の空海が歌うように言う。

結果が楽しみじやのう、と、フーは視線を細めて笑った。

「……………ようきた」

閻魔大王という名の老人は、今にも死にそうな程にやつれていた。黒地の和服には赤い渦巻き柄の刺繍が入っている。整えられた白の顎髭がその老いの度合いを示しており、二つの角がついた兜のようなものを被っていた。額には思い切り『閻魔』と書かれている。

フー曰く『霊は不老』だが、この閻魔はどう見ても老いた存在だった。

「ういつす」

雑な挨拶を交える。ダンマルたち三人は、現在中央閻魔室とやらに来ていた。頭が高いためか、正座を促される。閻魔以外に、空海フー、それに数人の側近と思われる男がいた。

先ほどの和室と違って、煌びやかな空間である。金銀等の貴金属で彩られた壁や家具の目映さが、三人を落ち着かせない。一方で、二メートル近い高さまで背もたれがある革作りの豪華チェアに、何故か体育座りをして縮こまる閻魔は、かなり絵的に浮いていた。

なお、ここに辿り着くまでに彼らを通った廊下は風情のある木造のものであり、しかし上に昇るために使ったエレベータは近未来式の筒型タイプだった。この建物にはコンセプトというものがない。職人が好き勝手やった、その集大成がこの建築物のようだった。

ややあつてから、オホンと空海が静かな空気を生み出す。

「写真撮影の前に、閻魔様から階級が発表されます。代表で一人に出で貰い、特別賞状を受け取って貰いたいのですが 誰かいませんか？ ちなみに、その受け取った方が写真中央に写ります。お隣は閻魔様ですよ！ 閻魔様は現世の日本という総理大臣ですよ！ 幸運！」

空海は興奮を隠し切れていなかった。写真撮影が相当に楽しみなのだろう。

「はいっ！」

意外にも、そこでヒナが真っ先に手を挙げた。興味津々なためか、目が爛々と輝いている。

「なっ……菊川さん！？ いや、だめだね、僕だ！ 目立つのは僕ですよ！」

鼻息を荒くしながらハカセが続いた。彼は眼鏡キャラだが、目立ちたがり屋でもある。

「ハカセくん、お願いっ。私ミーハーなんです！ このチャンスを棒に振りたくないんです！」

「ダメだ！ 棒を振るのは僕の役目だ！」

やや混乱したためか、ハカセは言い間違えた。

「おいおい、そういうことなら、俺、棒を振り回すのは得意だぜ！」
ダンマルは、それをさらに下半身の棒のことだと勘違いをして、自信満々に答えた。

「うっうっうっ！」

「むむむむっ！」

「ふっふっふ……！」

三者の間に火花が散る。そんな様子を見たフーが、ため息を吐きながら提案した。

「……ジャンケンで決めたらどうじゃ？」

「よかるう。僕はグーを出す」

「分かりました。私、グー出します」

「よっしや、俺もグーを出すぜ！」

拳を握りしめて構える三人。三者とも、にやりと口元を歪めた。彼らは自分のことを完全に棚に上げて、他の二人のことを阿呆だと思っ込んでいた。

他の二人は阿呆。つまりグーをそのまま出すだろう。故に、パーを出せば勝つことが出来る。

「ジャンケン、ポン！」

……全員パーを出していた。

「ふ……はははは！ やりましたよお婆ちゃん！ 僕……最高に目立ってますよ……！」

口元をタコのように尖らせて悔しがるダンマルとヒナに向かって、八カセが自らのおしりをぺんぺんしから挑発した。あいこの末の勝利。単純に、運だけで八カセが勝つたのだ。

「うーっ」

テスト中に使った熊の絵柄付きボールペンを握りしめながら、ぶるぶると震えるヒナ。よほど熊が気に入ったのか、彼女はそれを持ち帰る気満々である。

さて、と空海が枕詞を置いた。

「では、これより階級発表と、一億人達成賞状授与イベントを行います！ 一カメさん、二カメさん、準備オツケー？ 照明さん、節電でよろしくお願いしますね！」

「オツケーっす」

側近の男たちが、それぞれテレビの取材で使うような機材を取り出した。照明係までついているあたり、その本気さが伺える。側近はオールラウンダーなのだ。

そわそわしている閻魔に、空海は目で合図する。閻魔は頷きつつカメラ目線。コホンとわざとらしく喉を鳴らした後、親指と人差し指で輪を作り、そのままチェアの上で立ち上がった。

「こ、これより授与式を始める 代表、羽方政一、前へ！」

低くしわがれた声がどもる。名前を呼ばれ、八カセがゆっくりと前に出た。兵隊のような歩き方から、彼の緊張の様子が滲み出ている。

「で、あるからして、以上三名を記念すべき一億人目の天人人として招くことを、ここに宣言する。閻魔大王の名において、汝ら三名の階級を告げる！」

長つたらしい言葉の羅列の末、明らかな装飾過多、煌びやかな賞状を掲げる閻魔。賞状には表裏関係なくダイヤやルビーやが敷き詰められており、ギャルの携帯電話を連想させる。

「羽方政一！ 階級は『駄霊』！」

「……っ！？」

閻魔が声を大にして、最初の者の階級を叫ぶ。当然の如く、目線はカメラに向かう。

「桶狭間弾丸！ 階級は『駄霊』！」

「なにぃ！？」

駄霊が何なのかよく分かっていないはずなのに、無駄に反り返るダンマル。

「そして菊川雛瀬 階級は『悪霊』！」

「あ……悪霊っ！？」

「！？」

瞬間、ダンマルがヒナを見た。彼は悪霊という単語に覚えがあったらしい。

「待ってくれ、悪霊って！？」

慌てて尋ねる。ぼわぼわ系アイドルが悪霊呼ばわりされることに納得がいかない そんな様子だった。ダンマルは、いわゆる『人を呪う悪霊』をイメージしたのだろう。

「悪霊とは、生前に悪いことをした者や、天界で大きな過ちを犯した者に課される階級です。菊川雛瀬が犯した罪は 『自殺』。まあ、悪霊の中ではもっとも善良な種ですね」

対して、空海が答えた。しかし、自殺という単語にダンマルはピンと来ない様子だった。そしてそれはヒナも同様である。彼女もまた、「自殺……？」と疑問符を浮かべていた。

「……。ダレイ、というのは何だ？」

そんな中、ハカセが尋ねる。自らの階級が気になったのだろう。今度はフーが口を開いた。

「駄目な幽霊、略して『駄霊』じゃ。生前に大した成果を残さず、今後も大きなことを為せるとは到底思えぬと判断された、阿呆に与えられる冠じゃ。悪霊という特殊な犯罪階級を除けば、階級は天霊、貴霊、凡霊、駄霊の四種に分かたれる。駄霊とはつまり、能な

しの駄目幽霊、救えないカス、最低階級ということじゃ」

「……………あい。ということ、賞状。おめでとう」

フーの説明が終わって直ぐに、閻魔は煌びやかな紙を差し出した。ハカセはカスという言葉に呆然としながらも、賞状を受け取る。ビデオカメラ係が「こっち向いて」とカンペを出していたが、ハカセは無視して俯き、内股で貧乏揺すりを始めた。

そして、直後。

「最低階級……………？ 僕が……………？ 僕は、僕は……………おばあちゃんっ！」

ハカセがうがぁ、と天井を仰ぎながら、賞状を真つ二つに引き裂き、投げ捨てたのだった。それはカスと言われたことに対する、彼なりの怒りの表現だった。……………場が、硬直した。

結局、集合しての写真撮影は延期。賞状は作り直して、授与式は五日後にやり直しとなった。ハカセの暴走と前代未聞の「やり直し」はメディアを沸かせ、翌日から早くも「僕はおばあちゃんTシャツ」がネットで販売されることになるのだが、それはまた別の話である。

「全く、信じられぬことをしおるわ……………ま。ウチは外に出られるのが嬉しいから構わんがの」

ふふん、と得意げに鼻を鳴らすのはフーである。現在、ダンマルたち三名にフーを加えた四名は、閻魔宮の外部に出ていた。彼らが目隠して移動させられた理由は過去のテロ事件にある。テロ以来、基本的に閻魔宮の内外に物理的な交通は存在しない。一種、鎖国状態にあるのだ。

既に閻魔宮の外観はなく、結局彼らはどういった外見なのかを確認することもなく、新宿や池袋を思わせる都心へと出ていた。高層ビルに反響する自動車の騒音は、日本そのものだ。

フーが外に出られて喜ぶのは当然だった。内外の交流根絶後に重用された彼女は、実のところ閻魔宮から一度も出たことがない。「

再授賞式まで彼らが死なないように」と、空海が三人のボディリーダー役として彼女を同行させたのだが、フーはそれを大いに喜んだ。閻魔宮内部にそのまま再授賞式まで置いてくれる、という話もあったが、これはハカセが蹴った。ダメ人間扱いを相当根に持っているのだから。彼の心は荒野と化していた。

じっとしているのが苦手なダンマルも、外へ出ることに賛成した。ヒナだけが反対の意を示したが、結局ジャンケンでハカセが勝利し、外へ出ることが決まったのだった。

前日までに閻魔宮に戻ってくることに、死なないことが、閻魔側からの条件だ。

「というより、君たちは早く外で仕事を探すべきじゃ」

閻魔宮を出る前にフーが言ったその言葉の意味は、この後に分かることになる。

「なあ、フーちゃん」

「ウ、ウチをちゃん付けで呼ぶでない！ 無礼じゃぞどあほー！」

「そうか、すまん。ところでフーちゃん」

「……はあ。まあよい。なんじゃ？」

フーはすぐに観念した。

「俺は何で死んだのかな？」

「ふむ……それは閻魔様と空海様しか知らぬことよ。君らの死因などウチは与り知らぬ」

「じゃあ、菊川さんは何故自殺を？ この前一緒に花火でバカをやったばかりじゃないか」

ダンマルとフーの会話を裂いて、ハカセが一切の遠慮なくヒナに話を振る。花火というのは、七月下旬に彼らが夜の学校で行った口ケツト花火大会のことだ。菊川さん、と距離のある呼び方をするハカセだが、実際は別に余所余所しい間柄でもない。ダンマルとハカセ、ヒナの三人は、実は三年間同じクラスだったのだ。勉強会をとにもする程度の友好は深めている。ヒナの敬語も一種のクセのようなものであり、本質的には彼女も人懐こい人間だった。

ハカセが尋ねたかったのは自殺の動機だ。ともに愉快地花火を揺らした記憶からして、彼女が自ら死を選ぶような人間だなんて、彼には到底思えなかったのだろう。

「……死んだ時のことは覚えてないです。私が、自殺だなんて……けど、死にたいとは思ったことはありません。理由は……言えないですけど」

ヒナは俯く。彼女は彼女なりに闇を抱えているようだった。

「もしかして……僕のせいなのか」

突然ぴたりと、ビル脇の歩道で立ち止まるハカセ。思い当たる節があるようである。

「僕が……二年生の時……菊川さんの……縦笛を盗んだから……！」

それは信じられないカミングアウトだった。ダンマルとヒナが固まる。

「うわああ！ 僕は最低だあ！ 自らの私利私欲のために菊川さんを自殺に追い込んでしまっていただなんて……すまない……もうお尻で挟んだりしないから……だから、僕を呪わないでくれえーっ！」

ヒナ「悪霊という繋がりが、ハカセを混乱させているようだった。ヒナに呪われるかもしれないという脅迫的観念から、リコーダーを尻で挟むという性癖まで暴露してしまっていた。」

「ヒナ、世界平和のために潔くこいつを警察に連れて行こう」

ダンマルの提案に、フーは「それがよい」と頷いてみせる。ヒナが慌てた。

「あ、あの、呪ったりしません。っていうかあの時の犯人、ハカセくんだったんですかっ!？」

「まあね……僕は液体フェチなんだよ。ちょっと時間が経った体臭とかがいいね」

「呪い殺されればいいのに。あ、もう死んでるんだっ！」

既にダンマルには自分の死をネタにする程の余裕が生まれていた。「安心せい、呪いなんぞは人の世の妄想じゃ。悪霊とはただの階級

に過ぎん。特殊な能力なぞ何もない、ただの魂じゃ。悪霊や天霊、君のような駄霊の間に存在としての差はない。あるのは天啓の縛りと、世間からの差別のみじゃて」

「腹減った」

ダンマルは右から左に流すのが得意だった。

「聞けい！ 食事を摂るためにも天啓は必須なんじゃぞ？ そうじやの、現在君たちはその身に五万全を宿しておる。どれ、ちよつとナックでハンバーガーでも買ってみるとしようか？ そうしよう、決まりじゃ。ウチも小腹が空いておる。というかハンバーガーに興味がある」

促されるままに、ダンマルたちは天啓でハンバーガーを購入する。ナクドマルドは、本当に日本のナクドマルドそのものだった。

天啓は、円筒状の物体の上に手をかざした状態で、レジのような機械に数字を入力することで支払える仕組みだ。ダンマルがフーによる指導を受けながら、百と入力して決定すると、レジのモニターに「残り四万九千九百全」と表示された。「一人五万全という額をいつ手に入れたのか」という疑問がハカセの口から飛び出す、フーは「最初から」と答えるのみだった。

「天界は季節や風土も日本と同一での。天界日本区は夏真っ盛りで、大きく異なるのは教育制度と雇用制度くらいじゃ。ここには学校もない。……ああ、手をかざしたら天啓が支払える理由か？ これはつまり、銀行のキャッシュカードを身体に内蔵しているようなものでの。天啓を処理するサーバーのようなものが別途存在しており、天啓を並列で処理しておつて」

「私たちはついに、財布と合体するに至ったってことですかね？ すごいです！」

フーのトークを遮り、ヒナが真顔で変な感想を漏らした。一方、ダンマルは項垂れている。

「ところで、この天啓はのう、ただの貨幣ではないのじゃ。この世で最も大切なものでな」

ポテトを食べ終え、ハンバーガーをようやく一口かじりつつ、フーが核心に触れる。

「おお……これがナツクのハンバーガーか！ うむ、中々に美味であるぞ！ いやはや、恥ずかしながらウチはこの食べ物を動画でしか知らなくて……おっと失礼。そんなことよりじゃな」

オホンと咳をした後、彼女は今度こそ核心に触れる。

「天啓とは命じゃ。結論から言つとな、『天啓がマイナスになった状態で四日が経過すると強制的に転生をさせられる』のじゃ。ネガティブ転生と呼ばれており、人気がない生命へと転生させられることになる。天啓とは貨幣でありながら、命でもある」

転生。つまり、天啓を失えば何らかの生命として生き返るということである。

「人気がない生命に転生……？」

「そうじゃの。例えば君たちは、八エやダニとして生き返りたいか？」

「……嫌ですね」

「そういうことじゃ」

ヒナは納得したようだった。フーはそのまま続ける。

「まず、記憶がなくなるのじゃ。脆弱な八エとして転生し、その後現世で死ねば、天界には八エの魂として戻ってくることになるう。

その場合、ウチらとは違う様式で生きていくことになる。説明は省くが、そこに人としての意志も記憶も宿らぬ。意志の強い悪霊なんかは、八エから人型へと戻る可能性もあるが、まず有り得ぬ。まあとにかく、天啓を無駄遣いすれば八エに変えられて人としての人生を損なう ということじゃ。分かったかの？」

「さっぱりだぜ！」

ダンマルは自慢げに答えた。

「天啓、つまりその約五万全を無意味に使切れば、君は一生八エ生活ってことじゃ」

「……まじか」

大分簡略化された言葉でようやく理解したダンマルは、ごくりと固唾を呑む。

「ちなみに、このネガティブ転生システムはの、ポジティブ転生システムだけでは循環が間に合わなくなつた故の処置なのじゃ。ポジティブ転生とは天啓を支払い、貢献することで、好きな生命に転生出来る仕組みでの。しかしながら、転生に必要な天啓を支払える程の天霊の大半は、不老である霊として生きることが望んでおる。自ら進んで転生しようとする者は減っていきおつた。故に霊は増える一方での。対して現世の八エヤダニなどはそれまで無機物から生んでいたのじゃか、無機物転生だけではその種が絶滅するという法則があり、強力な人間の魂を種に混ぜ合わせることが必要となつた。結果、天界から減らしたい魂と、現世に増やしたい魂の需要と供給が……って、聞いておるか？」

「やべえ、今のお姉さん足細っ！」

ダンマルは他の客に夢中だった。携帯電話のない空っぽのポケットに、手を突っ込んでいる。

「聞けい、どあほー！ …… はあ、まったく。つまりな、天啓を集めれば人間として好きなように生まれ変わることも出来るということじゃ。天啓の大切さが理解出来たか？」

分かりましたと、ダンマルの代わりにヒナが大きく頷いた。

「さて、ここで悲しいお知らせじゃ。何故、階級システムなるものがあるか分かるか？」

「……不景気だからですかね？」

「違うのう。いや、案外惜しい。正解は、『才人主義国家』だからじゃ。天霊や貴霊、才能に溢れる高貴な者たちには毎日無償で天啓が与えられ、逆に駄霊や悪霊、社会的に価値を見出せない者たちの口座からは毎日天啓が引かれる。要は税金じゃよ。そうして、税が払えぬ哀れな者たちは、財務が赤字となって強制的に転生させられるのじゃ。よう出来た仕組みじゃろう？」

にやりと笑う高飛車なフーは、自らが貴霊であることを誇ってい

るようだった。

「えっとつまり、私たちは毎日天啓が減らされるってことですか…
…？ どれくらいですか？」

息を潜めながらナックシェイクを握るヒナ。フーは愉しげに、答えた。

「駄霊は一日につき二千全。悪霊は、一日につき一万全じゃ」

それが、ダンマルやヒナに課せられた階級による天啓税。つまり、とフーは続ける。

「何もしなければ、君はあと五日で天啓がゼロになるじゃろう

『悪霊』の、菊川雛瀬よ」

フーは当初より、それが言いたかったのだらう。何もしなければ天啓を浪費して消える運命。

『何もしなければ』。三人 特にヒナは、どうにかして天啓を稼ぎ続けなければならない。

「働きたくないでござる！」

まさかのフリーター生活スタート。面倒くさがりのダンマルから、思わず本音が飛び出した。手持ちの約五万全がなくなったら八工化。その真の恐怖を他の皆より遅れて理解したダンマルは、ここにきて涙目になっていた。一刻も早くアルバイト先を見つけなくてはならないこの状況を前にして、彼らは現在焦りっぱなしである。

フーを除いた三人は天界で使える携帯電話を所持していないため、無料配布のアルバイト誌を捲りながら、公衆電話で片っ端から電話をかけていた。しかしその結果は無残なものだ。

「すみませんねえ、駄霊の人は使えなさそうなんでちょっと。先に凡霊昇級試験でも受けてきたらどうです？ え、可愛い悪霊の女の子もセット、ですか？ はは、悪霊なんて論外ですよ」

異分子の三人は、ようやく世界の構造を知るに至る。駄霊や悪霊は、学校で言うところのいじめられっ子のポジションだった。階級一つで、あっさりと雇用を断られてしまう。

ハカセが怒って何度か公衆電話を蹴り飛ばしたことも、ある意味では仕方のないことだった。

閑話休題、天界には階級を高めるための試験が存在する。試験に合格し凡霊となれば、圧倒的に仕事が入りやすくなるだろう。しかし、合格するにはこの世界で何らかの結果を残すか、あるいは試験で高成績を残すしかなかった。

「君たちの感覚で言えば、偏差値六十以上は必要じゃな。下から上に這い上がるのは難しい。特に悪霊は頭がいいだけではダメじゃ。百年善行を重ねる等、人格的結果も必要となるぞ」

彼ら三人で試験に挑戦するという道は、フーのこの言葉によって一瞬で絶たれた。あくまで駄霊、そして悪霊として生きていくしかないという結論に、それぞれが至った。

「ところで、その情報誌に載っているような真つ当な仕事は、君たちの階級ではキツイのではないか？　そこで提案なのじゃが……くくらぶに行ってみてはどうじゃろうか？」

そんな時、フーによって謎が提案が行われたのだった。曰く、駄霊や悪霊に回ってくるような後ろめたいな仕事は、同じくアングラな場所で提供される可能性が高い、とのことだ。

「というより、ウチ……くくらぶに行ってみたいのじゃ。その……お、踊ってみたい……」

そっちが本音だった。

結局、先の見えない電話での活動に限界を感じ、三人はフーの提案に従うことにした。

「まあ、その前にトイレじゃの」

何故だかフーのトイレは物凄く長い。三人は一時間ほど待たされた。

三毛鼻^{みけくそ}の街を歩く。ダンマルたちが空海にテレビで見せられた、爆発事件のあった地域だ。池袋をモチーフとした場所だが、現世の池袋以上に混沌とした雰囲気である。落書きだらけの壁を過ぎて、

時刻は二十時。四名は、『ハイパーぱいぱい』と書かれたクラブに入っていた。

惜しいことに、そこはおっぱい倶楽部だった。

「うっうっうっ！ な、なんで私がこんなことするんですかー!?」
目に涙を浮かべるヒナは、バニーガールの衣装を纏っている。拍手喝采。感嘆が飛び交う。

いろいろと間違えていたにも関わらず、結果的に彼らはアルバイト先を見つけるに至った。ここハイパーぱいぱいは、いわゆる巨乳キャバクラであり、偶然にもヒナは巨乳だったのだ。

さらに幸運なことに、ダンマルたちもボーイとして雇って貰えた。相当に人手が足りていないらしく、小柄なフーでさえ従業員としてサポートに回された。「ウチもそっちが良かった」と、ヒナを見ながら頬を膨らますフー。彼女は自らフロアレディを志願したが、胸のサイズのせいでええなく撃沈した。そもそも彼女が働く必要はないのだが、遊び感覚で志願したようだ。

「あらあら、似合ってるわよウサギちゃん！ えーっとお、源氏名はピクシーちゃんね？」

「イエス、マイロード！」

オカマ系店長の質問に対し、ハカセがヒナの代わりに答えた。その源氏名の名付け親が彼だからだ。ちなみにダンマルが提案した『ミシシッピ菊川』は即座に没にされた。

「うー」

観念したヒナは着席し、渋々と仕事を始める。最初は嫌そうにしていた彼女だが、徐々に慣れていった。働かなくては八エになる。その圧迫感が原動力となるのだろう。

一方、ヒナの接客を眺めるダンマルは、どこか落ち着かない様子だ。他に職場がなかったとはいえ、女友達が他の男に接客をする、というのは見ていて気分がいいものではないのだろう。

お触り禁止とはいえ、中年に絡まれるヒナが不憫で仕方ない

そんな雰囲気だった。

「止めとくか？ 他の仕事だって、探せばきつとあるはずだしさ」
ダンマルが気持ちを抑えられなくなったのは、二十二時を回った頃だった。彼らしからぬ至極真面目な発言だったが、しかしヒナは、ここに来て首を横に振る。

「私、続けます。稼がなきゃいけないですから。……これ以上、皆に迷惑をかけたくないです」

ヒナは、自らが悪霊であることを必要以上に気にしていたのだ。

実は彼らがアルバイトを探す際、「駄霊はぎりぎり考えるが、悪霊はダメだ」という条件を提示されたことが何度かあった。しかしダンマルは、その度にそれを拒否したのだ。ヒナも一緒じゃなきゃ意味がない。ダンマルが毅然と言い返したその言葉に対し、ヒナは感謝ではなく、申し訳なさを感じたのだろう。だから彼女は仕事を続ける。足を引つ張りたくないのだ。

そんな様子を知ってか知らずか、ダンマルは反論せずに「そうかと呟く。

状況が一転したのは、そんな時だった、

「クラーク・ゴールド様のご入店だぜ！ がははっ、酒とおっぱい持ってこい！」

豪快に店の自動ドアを超える恰幅のいい中年。貴霊、クラーク・ゴールドは日本のキャバクラとほぼ同じ造りの店内を悠然と闊歩する。赤の絨毯を進み、VIPルームへと押し入り、ドカツと乱雑に腰掛けた。金色の顎髭をたなびかせるその男は、ガラス越しに、接客に勤しむフロアレイディたちをまじまじと眺めた後、

「あのおっぱいにするでしょう！ 白が似合う女は胸の形がいい…

…！」

入って初日、新人であるヒナを指名するのだった。

「ピクシーです。よろしくお願いします」

「まあ、座れ。ところで豊満な胸だな、おっぱいよ。どうやって育てた？ 牛乳か？ 男か？」

手慣れてきたヒナは一礼をし、男の隣に着席する。笑顔が卑屈な中年だった。

そして事件は、数分に及ぶ男の卑猥な話の後に起きる。

「さあーで、どんな感触かなあー？ おっぱいちゃあーん」

突然、クラークが涎を垂らしながら、ヒナの胸を鷲掴んだのだ。た。

「きゃっ!?!」

「てめえっ! よくも俺の……俺のおっぱいをー!」

誰よりも早く飛び出したのはダンマルだった。彼はクラークに嫌悪感を抱き、視線を鋭くして眺めていたのだ。残念ながらヒナの胸は彼のものでもないが、その情熱は本物だった。

だが、しかし。

「お前だけは絶対に許はぐあっ!?!」

彼は男の手下に頬を殴られる。もう一人に掴まれ、膝で蹴られて転がった。頭部を片手で引きずられ、テーブルに向かって投げ飛ばされる。後頭部を角にぶつけて、赤い液体を流した。

ハカセはビビッてしまって内股になっている。ヒナはやめると叫んだが、黒服の男によって弾き飛ばされ、ソファーに転がった。フーは五分ほど前にトイレに向かったまま帰ってこない。「止めなさいおバカ!」と、ダンマルは店長に引っぱたかれた。それでも彼は立ち上がる。限界を超えたボクサーのように、考えもなく馬鹿みたいに向かっていた。

「お前らはこの俺を怒らせた……この俺の必殺の右がお前らを痛い痛い痛い折れるっ!」

組み伏せられ、腕を踏まれる。骨がみしみしと嫌な音を刻む。既にダンマルは体中あざだらけで、痛覚も麻痺しているようだった。やめて、とヒナがクラークに食らいつく。しかし彼は黙れと叫んで、ヒナの顔面を殴り飛ばした。……ダンマルは、その表情に怒りを露わにする。

「やっべ……キレたわ、俺。ふざけんなああっ!」

力任せに振り切つて、ダンマルはクラークに殴りかかる。しかしそれは阻まれ、部下によつて再び組み伏せられた。同時、苛立つクラークは胸元から銃を取り出し、ダンマルへと向ける。

そこで、事故が起こる。銃声は響かなかつた。その代わり、金属が跳ねる音が響いた。

「おつぱい、貴様……！」

ヒナが、クラークのネックレスを後ろから掴み、そのまま引きちぎつて投げ捨てたのである。

「やめてくださいって、言ってるじゃないですか！ この、外国産の豚野郎め！」

ヒナは顔を真っ赤にして叫ぶ。何故か、彼女らしくない罵声も含まれていた。

「くく……がはははははっ！ 豚だと？ はっ、弁償だ！ おい、

天啓裁判官を呼べ。即時裁判で判決を下してやろうぞ。おい、おつぱい……貴様、階級は駄霊か？ 答えろ、店長！」

一方、愉快的調子でクラークは店長を呼びつける。悪霊よ、と店長は怯えながら答えた。

「……悪霊だと？ ふん、最悪だなこの店は。まあ、いい。ならば売り飛ばす価値も手を下す価値もない。さつさと赤字積んで、絶望に苛まれながら、早急に天界から失せるがいい！」

そう叫んだクラークを止められる者はいなかつた。

そうして、裁判が終わつた。すつ飛んできた天啓裁判官なる者が判決を下し、ヒナは『天啓譲渡』という義務を負わされた。誰も、抗えなかつた。一時間に渡る長いトイレからフーが戻ってきた時には既に、クラークの勝訴という形で全てが決していた。

罰金 『五千万全』。

ヒナの天啓口座から五千万全という大きな額が、自動的にクラークへと支払われる。

天啓は、訴訟時に限り赤字決済が可能である。ヒナは寸刻におい

て、全財産を失った。

すなわち、早急に五千万全を集めない限り、ヒナは八工となって消える。

タイムリミットは 『四日』。

「八工どころではないじゃろうな……分かり辛いとは思うが、天啓とは祝福の値でもあるのじゃ。これだけマイナスになって転生をするとなれば、さぞかし壮絶な悲運とともに幕を閉じるのじゃろう。そして、そんな惨い転生を永らく繰り返す。死より重い 罰じゃ」
ダンマルの表情が強ばる。彼なりに責任を感じていた。そしてそれは、何も出来ずに終わってしまった八カセも同様だった。このままでは、ヒナは。

現在彼ら四名は路地裏にいる。クラークたちは満足したように帰って行き、ダンマルたちはもれなく店をクビにされた。あてのない静かな夜。しばらく、静寂が続いた。

「……フーちゃん、教えてくれ。どうしたら大金を稼げる？」

「いいんです、ダンマルくん。これは……私がしたこと、ですから」

「悪い、耳クソ詰まって聞こえねー。なあ、答える、フーちゃん」

「……そうじゃの」

ヒナの言葉に耳を貸さないダンマル。シリアスな雰囲気を押され、フーが言葉を返した。

「『大黒天』と名乗る賞金首がある。この三毛梟で起きている連続爆発事件の容疑者での。被害を受けた天霊から、私的に莫大な賞金をかけられておるらしい。その額は 五千万」

「五千万の賞金首……？」

「腕の立つ凶悪犯じゃ。顔も目的も不明で、正直ウチもネットの情報でかじったくらいじゃが」

「いや、十分だ、ありがとうフーちゃん。話は分かった。つまり四日以内にそいつを捕まえて、五千万ゲットすればヒナは八工にならずに済むんだろ？」

ダンマルは静かに肩を回し、首を回す。体力バカは、痛みを気に

せずに立ち上がる。

「働くよりは簡単そうだ」

彼にしては早い呑み込み。しかし、すぐにその台詞を後悔することになる。

一人の男が立っていた。ライダーズジャケットを纏い、フルフェイスを被りながら。

「……………挑戦的な男は嫌いではない」

裏通りの反対方向。ダンマルたちと向かい合う形だった。電灯が男の黒さを引き立てており、素顔を晒す気がない様子で、キイツと漆黒のブーツを道路に擦り合わせ、摩擦を奏でる。

「しかし、弱者のそれは挑戦ではない。…………それはただの無謀だ。恐怖を知らぬ小僧の論理」

一歩ずつ、男が近付く。フルフェイスより漏れる声。フーが何かを察したように、戦慄する。

「何だよお前…………今俺は気が立ってんだ！ ケンカなら買うぞ!？」

「や、止めておけ桶狭間弾丸ッ！ この威圧感…………いい、嫌な予感がしおる…………ッ！」

「……………少しだけ遊んでやろう。我が首に懸けられた五千万、まづはその重さを知るがよい」

突然に、男が道路を蹴った。瞬時にして間を詰め、ぼかんとするダンマルに向かって、

「いかん！ 退けッ！」

「っ!？」

一切無駄のない、流麗な蹴りを放った。体重の軽い人形のように吹っ飛ばされるダンマル。転がり、跳ね上がり、視界に空と地面を何度も入れ替えた後、うつ伏せで倒れる。

「ひ、ひい…………お、おばあちゃん助けてえっ！」

ハカセが情けない声を上げる。同時に、フーが額に冷や汗を流しながら、構えた。

「……………議題その一。『貴様らの命は五千万全よりも軽いのか?』」

……オレを捕らえるということとは、つまりそういうことだ。リスクとして死を背負う。その覚悟はあるのか？」

男がひゅん、と軽やかに跳ね、フーを尻目にダンマルの脇に着地する。意識が朦朧としているダンマルの髪の毛を掴み、手繰り寄せ、何処からか取り出したナイフを首元に押しつけた。

「ぐ……たん、ま……頭が……」

「ダンマルくん……っ」

「動くな菊川雛瀬！ くそっ、人質か！ もはや間違いなかるう……奴が『大黒天』じゃ……！……！」

フーが右手でヒナを制した。緊張が走る裏路地で、フルフェイスの男が頷いてみせる。

「いかにも、我が名は大黒天。……さて、議題に対する貴様の見解を聞かせて貰おうか、小僧。貴様は五千万のために何を賭けられる？ 小僧の論理なら殺す。嘘を吐けば殺す。正論も殺す」

男は無茶な注文を浴びせる。しかしダンマルの表情には強い意志が宿っていた。

「ど……うでも……いい！ 放せよヘルメット野郎……！」

それが答えだった。通常ならじつくりと考えるべきシーンで、しかしダンマルは何の迷いもなく、考えることもなく、ストレートに議論を放棄し、言い切った。

「……小僧以下だったか。いや、なるほど、しかしそれはそれで一つの達観やもしれぬ」

くくく、と冷ややかに笑いながら、男 大黒天は手を離れた。

「……さて、ここにオレがいるのは偶然ではなく必然である、ということ、まずは事前に述べておこうか。続いて大前提となる話なのだが……今、オレはこの場にいる全員の命を握っている。距離は関係ない。オレは貴様らをいつでも殺せる。理解しているな？

閻魔の者よ」

「くっ」

フーは唇を噛みしめる。彼女は力量さを理解しており、その足は、

自然に震えていた。

「……………その上での提案その一、だ。携帯電話をこちらに渡せ
閻魔の者よ」

この場にいる全員を人質として、大黒天は一方的な要求をフリーに
迫る。

「わ……………分かった。元より、携帯電話を守れ、という指令は受けて
おらぬ……………」

フリーは呼吸を整えながら、携帯電話を和服の袖から取りだし
上方へと投げる。

「ご苦労、と大黒天が言葉を紡ごうとした、その時だった。

「などと……………言つても思つたか曲者ッ！」

刹那、フリーはすかさずクナイを取り出し、一直線に投擲する。携
帯電話を投げたのはあくまで陽動のため。五本のクナイが鋭く風を
斬り裂き、ピンポイントに大黒天の急所を狙い撃つ。

「……………愚かだな」

しかし大黒天はそれを易々とナイフで弾いて見せた。丁寧に最後
の一本を足で蹴り上げ、空いている左手で掴んで見せる。同時に、
上方に投げられた携帯電話を、右足の甲でキャッチした。圧倒的な
実力の差を見せつけるかのようなパフォーマンス。全員、絶句する。

「……………さて、提案その二だ。大人しく従えば」

「そこまでや」

瞬時にして場面が変わる。横一闪、水平の剣撃が路地裏を一瞬だ
け輝かせた。

「……………やれやれ、また貴様が……………かちよつぷうげつ花鳥風月。分かりやすい奇特
な髪型は相変わらずか」

九十度近くまで腰を捻って斬撃を躲した大黒天は、面倒臭そうに
呟いた。

「ちやうわボケ、何回言わすねん！ はなとり花鳥、はなとりかざつき花鳥風月や！ あと次
髪のこと言つたら殺す」

さらに踏み込んで袈裟斬りを放つその男。リーゼントで固められ

た時代錯誤のヘアースタイルに、アロハシャツを着ていた。下は短パンで、両手に把持した日本刀だけが浮いている。

大黒天は距離をとって避けながら、男　花鳥に尋ねる。

「……………何故ここが分かった？」

「はん、僕の二つ名をド忘れしたん？　自分。ハイパーぱいぱいで大乱闘があつたつちゅー話を聞いてな。そんなん駆けつけな、『野次馬二次災害』の名折れやん？　ほんで行くやん？　したら、お前さんおるし！　ごつつラッキーやし！　以上。ま、つまりラヴの力つてことや！」

軽口を叩きながら、さらに攻める花鳥。大黒天はそれをナイフで弾きながら下がっていく。そこへ、フーが隙を突くようにして、狙いを研ぎ澄ませてクナイで追撃した。

「……………くだらぬ」

「今日こそもろたわ五千万っ！」

大黒天がクナイを躲すと同時、剛の剣がナイフを弾き飛ばした。大黒天はクナイを拾って投げつけるが、花鳥は刀の柄の部分でそれを弾く。その隙に、大黒天は大きく横に飛び退いた。

「……………っ！？」

「……………形勢逆転だな、花鳥風月。貴様の弱点は、女性に甘いところだ」

大黒天は、狙ったようにヒナの後ろに回り込んでいた。おかげで攻めあぐねる花鳥。大黒天はそのままヒナの首に手を回し、くくく、乾ききつた笑い声を漏らした。

「うわ、さては卑怯もんか自分」

「……………合理的なだけだ。さて……………」

「……………っ！？」

突然だった。大黒天にとって予想外の方角から、石が投げつけられる。三年間野球部でピッチャーをやっていた男　起き上がったダンマルの肩は、コントロールをまるで違えない。

「……………っ！？」

大黒天はそれをすれすれで避けるが、結果としてヒナを離すことに繋がった。花鳥はその一瞬を逃さず、剣撃にて追い打ちをかける。たまらず大黒天はヒナをその場に置いて後方に跳ねるが、更にクナイが差し迫った。彼はこれをナイフで弾くが、その反動で携帯電話が宙に舞う。チツと舌打ちをしながらも、「まあいい……引き際か」と彼は呟いた。

「またんかい！」

闇に溶けていく大黒天。花鳥は数歩程追いかける仕草を見せたが、すぐに足を止める。

まあええか、とため息を吐いて、ゆっくりと振り返った。

「今日はええわ、明日は大会やから怪我しとーないしな。……ほんで、なんやオモロそーな四人組やなあ、自分ら？ 知つとるで、あれやろ、一億人目のラッキーボーイズ&ガールズやろ」

関西弁で語りかける花鳥は、気さくそうに振る舞う。ダンマルはよろめきながら、フーの横に並び立つ。ハカセは腰を抜かしており、ヒナは身体を震わせていた。フーは携帯電話を拾う。

「携帯は無事……結果オーライじゃな。……で、君は何なんじゃ？」

フーが尋ねると、花鳥はよくぞ聞いてくれましたとばかりに胸を張って答えた。

「フリーの賞金稼ぎ、花鳥風月や。あ、これ芸名な。ほんで今は阿呆の大黒天を追いかけたり、そのへんの首付きをひつつかまえたりしとんねん。趣味は野次馬とパラッチ。よろしゅう！」

「賞金稼ぎ……」

ダンマルは拳を握りしめる。実力の差を噛みしめているのだろう。彼は己の弱さを知った。

「それより、あれおもしろかったで、ほんま。ほら、賞状破いたヤツ。裏の速報見て、腹抱えて笑うたわ。あの賞状売ったら一億全くらいになるん言つんに、破くんやもん自分ら」

「……へ？」

声が重なる。全員、目が点になっていた。知らなかった、とフー

が唸る。

「ほんで僕が聞いた情報やと、二回目の賞状は腹いせに安もんで作るらしいわ。ドケチの閻魔に戻ったやんな。精々五百万ってとこやる。あーあ、自分らもつたいな……ほんまないわー」

ほんまないわと言いたいのはダンマルたちの方だろう。

「……マジで？ 売ったら一億？」

「マジや。僕でもなかなか一億ゲットのチャンスには巡りあわんゆーんに。もつたないなあ、自分らホンマ。しかもノーリスクやし。こちらら五千万稼ぐんに、大黒天みたいな化けもん相手にせなあかんつちゆーねん……知つとるか？ あいつ、銃弾躲すんやで、有り得んやろ？」

日本刀を鞘に納めながら、ないわー、と呟く花鳥。ダンマルは少しばかり思考し、

「……あのさ。実は俺たち、すぐにでも五千万が必要なんだ。おじさん、賞金稼ぎなら何かいい方法知らない？ いや……もしくは、数日で強くなれる方法とか、さ」

「おじさんちゃうわ。僕まだ二百八十五歳やし」

見た目二十代前半のリーゼントが答えた。

「ほんで、数日で強くやて？ 阿呆か自分。強いのは単純に鍛錬の成果や。僕や大黒天かて初めから強かったワケちゃうわ。大黒天がなんぼか知らんけど、百年単位で鍛えとるはずやわ。数日で強く？ 無理無理、そんなん出来るんやったらむしる僕が知りたいつちゆーねん」

花鳥は首を横に振る。ダンマルはがっくりと肩を落とした。幽霊に特殊能力なんてない。強さは単純に才能と努力に比例する。それがこの世界だ。ダンマルが大黒天に勝つことは難しい。

「でも……せやな。稼ぐんやったら、せこい方法やけど、いくつか知つとるで」

「教えてください」

そこへ突然、調子を取り戻したヒナが割って入る。ダンマルも領

く。

「オススメは他人をハメることやな。他人に罪を着せて、他人に懸賞金を懸けて、それを狩る」

「……？」

「例えばな、金持ちでプライドが高い貴霊の屋敷に誰かを騙して忍び込ませ、番犬とかを皆殺しにすんねん。んで、ずらかるんや。貴霊は懸賞金を懸ける。自分らはそれを狩る。どや？」

「最低じゃな」

貴霊であるフーは不機嫌そうに言った。

「やったら、ギャンブルとか、恐喝とか、濡れ衣着せて裁判勝訴とか、いつそ天啓サーバージャックとかやんな。ま、後者三つは犯罪やけど。宝くじでも買ったらどや？ それが嫌やったら大黒天レベを狩るしかないでホンマ。せやけど無理やる？ 五千万の首は伊達やない」

嫌みのように言い返す花鳥。フーは彼と静かに睨み合っていた。

「ははっ、そう睨まんといてや。とにかく、五千万を稼ぐつてのはそういうこつちゃ。素人が見よう見まねで賞金稼ぎやれるほど、この世界は甘ないねん。文字通り、百年早いわ」

「百年……そんなに待てるか！ 俺たちは四日以内に五千万集めなきゃなんねえんだよ！」

「僕に言うたかて知らんし。ま、何とかしいや。終電なくなるんで帰るな。ほんじゃ」

腕時計を眺めた後、ニカツと笑いながら花鳥は去っていく。嵐のようなりーゼントが立ち去ると、辺りは何事もなかったかのように静かになった。時刻は既に〇時を回っている。

「くそっ……どうする？ っていうか何してんだよ、ハカセ」

「う……うるさい！ これは……おばあちゃんが『どっしり構えろ』と言っていたから……」

ハカセは体育座りのまま、ガタガタと震えていた。

「……」

再度沈黙。三十秒ほど静まりかえって、そして。

「そうか……他人ではなく……自分をハメればいいんだ……!!」
「……?」

ダンマルが、突然閃いた。

「つまり、俺が賞金首になればいいんだよ。賞金五千万になるくらい悪さをして、そして、ヒナがそんな俺を捕らえる。すると、どうなると思う、ハカセ?」

「……。……。菊川さんの赤字が……。なくなる?」
「そういうことだぜ!」

恐る恐る答えたハカセに対し、ダンマルが大きく頷いて見せる。その後自分がどうなるか、という部分を彼は完全に失念していた。真っ先にその不毛さに気付いたフーは、ため息を吐きながら口を開こうとする。

「あのな、そんなことをしたら……。…」

「さっきから話は全て聞かせてもらいやした!」

しかし、それを遮るように、謎のマッチョ男が都合良く現れた。

「えーっと、何?」

疲れ切っていたダンマルは面倒臭そうに言う。夜風を弾くタンクトップ一枚、深掘りの顔にガリガリの肉体。きっちり七対三に分けられた前髪はテカテカしており、厚い唇が暑苦しさと憎らしさを振りまく。誰の目から見ても気持ち悪い中年男性が、彼らの目の前に立っていた。

「拙者、天草太郎あまくはたろうと申しやす。ハイパーぱいぱいのシルバー会員で、さっきのやりとり見ていて……。それからずっとピクシーちゃんを…

…あ、いえ、皆さんのことをつけてたっす!」
「帰れ変態」

そう冷たく言い返すのは、リコーダーを盗んだ経験を持つハカセである。先ほどまでは爪楊枝レベルに小さい男と化していたはずだが、変態に対しては強気なのだった。

「し、仕事の話がありやすよ! 違法賭場で行われる、霊と化け物

の賭け試合、そこで勝者に与えられる草薙の剣！ これ、売ったらなんと一億全になりやす！」

「……なんだつて？」

億というとんでもない単位に、びっくりと全員の耳が反応した。

「それを強奪して闇市に転売、拙者とそちら四人で分け前は半々。どうすか？」

「……怪しい。違法賭場など、この日本区に存在するものか。ウチは聞いたことがない。ましてや、草薙の剣？ 千年前に紛失したお宝中のお宝ではないか。それが何故今頃出てくる？」

フーが剣呑とした疑いの眼差しを男 天草太郎へと向ける。

「知らないのも無理ないですぜ。ネットにも載らないっすから。裏の世界じゃあ、草薙はとっくに見つかってるんですわ。あちこち持ち主を変えて、今の持ち主はクラーク・ゴールド」

「……なんだつて？」

同じ言葉を繰り返すダンマル。

「気付きやしたね。そうっす、そういうことっす。違法賭場の運営者は、クラークなんすよ」

と、天草。ダンマルはぎろりと彼を睨み付けながら、低い声で尋ねる。

「誰それ」

ダンマルは記憶力が悪かった。

「クラークですぜ！ ほらあのデブの髭親父！ あんただんだけ記憶力疎いんすか！ クラークは超速で裁判官連れてきて、すぐさまピクシーちゃんを裁いたクソ野郎っすよ！」

「ああ、あいつか……！ いや、すまん、いろいろ出てきて分からなくなつてて」

「まあ、見た所お兄さん方はここに来て一目。気持ちは分かりやすが……。とにかく、五千万全集めたいんすよね？ クラーク、ムカつくっすよね？ 先に手を出してきたのはクラークのはずですぜ。ピクシーちゃんのおっ……胸を触ったアイツを、拙者も許せないん

すよ。ぶっ潰しましようぜ、ヤツの賭博場を。損をするのはクラー
クただ一人っすから！」

「……なるほど。確かにおっぱいを守りたい……その気持ちは僕に
も分かる」

「分らないで欲しいです……」

ハカセが変な部分で共感したが、ヒナはどん引きしていた。

「……君は何者じゃ？」

「拙者でございやすか？ ま、いわゆる『ギャング』ってヤツです
ぜ。ワケあって、今回の仕事は一人でやるつもりだったんすがね……
クラークが来ると見越してハイパーぱいぱいで張っていたら、偶
然お兄さん方が来たワケっす。んであの騒動、利害も一致と」

「……ぎゃんぐか。なるほど、それは……面白そうじゃのう……
ふふ……分かった」

何が面白いのか、フーはにたりと笑みを浮かべながら頷いた。

「さて、どうする？ ウチは構わぬ。そもそも君らの問題じゃ。君
らが決めるとよい」

「やるよ」

即答だった。ダンマルは基本的に決断力がある。しっかり考えた
かどうかは別として。

「一石二鳥だしな。お宝盗んで、その上悪いことをした俺はきつと
賞金首にもなれる。完璧だ」

あくまで自分の考えを取り入れたいダンマルだった。

「いや……あのな、だから、別に賞金首になったところで、」

「僕だってやってやる！ このままでは終われない！ お婆ちゃん
に顔向け出来ない……！！」

突然、ハカセが奮起した。フーの台詞を塗り潰して立ち上がる。

彼はようやく立ち直った。

「お婆ちゃんはいつも言ってた。『誇れる生き方をしろ』って。し
かし今日の僕は……点数をつけるとすれば、正直、七十九点くらい
だった……！！」

「高すぎやしないか？」

フーが毒突いた。一方、ヒナは拳を握り、唇を噛みしめながら言う。

「やめてください。もう、結構です……これは、私の問題ですから……ん？」

彼女の真剣な眼差しに、ダンマルは疑問符を浮かべる。

「だって、私は皆を巻き込んでばかり！ 無茶ですよ、一億の宝を盗むなんて出来るはずないじゃないですか！ 私たち、高校生なんですよ！？ そんなの、危険すぎます……！ 大体、なんでダンマルくんとハカセくんは『死んだ』んですか！？ 誰も口にしないけど、そんなの分かりきってるじゃないですか！ 私自殺をしたらせいですよっ！」

目に涙を浮かべながら、ヒナは声を荒げた。一気に捲し立てる。

「私が自殺しようとして、ダンマルくんとハカセくんが止めようとして、そして、死んだんですよ……！ そうに決まっています！ 全部私が悪いんです……だから、もうこれ以上私はっ」

「仮にそうだとしたら、」

ダンマルが、彼女の言葉を遮る。

「俺はそんな俺の生き方を誇りに思うけどな！」

考えもなく、打算もなく、素直な気持ちを全開にして、彼は微笑んだ。

「お前っ！ 僕のお婆ちゃんの台詞を取ったな！ 消費税払え！」

ハカセが喚いていたが、ダンマルはそれを黙殺する。そうして、そのまま大きな声で。

「どうでもいいことをいちいち気にすんなバーカッ！」

破顔一笑、白い歯を一面に押し出して、ニカッと笑ってみせた。

「で、でも……」

「そうだな。じゃあこうしようぜ？ 俺たち三人はファミリーだ。

この天界には父さんも母さんもいない。だから俺たち三人がファミリーだ。んで、家族ってのは、助け合うもんだろ？」

「ダンマルくん……」

「三年間一緒だったんだ。ヒナは夜の情事に例えて勉強を教えられたし、図書室にエロ本を発注する方法を覚えてくれたし、後は……えーっと、俺記憶力悪いから結構忘れちゃったけどさ。でも、とにかく俺には理由があるんだ。手を貸したいと思えるだけの、理由がさ」

「待つがよい。勝手に三人にしないでほしいの」

フーがやや前の話にツツコミを入れる。

「四人に訂正してくれ。護衛係とはいえ、ウチも君らを仲間だと思っておるのじゃ。まあ、家族というのは抵抗があるがのう……そうじゃ、ぎゃんぐ、というのはどうじゃ？ 疑似家族、ファミリーはマフィアを連想してしまう。それよりウチは今流行のぎゃんぐの方が……」

ちらりとフーは天草を見る。天草が先刻述べた、ギャングというものに興味津々のようだ。

「……ギャングか。そうだな。確かに悪いことをするならギャングかもな。うん……採用！」

ダンマルが頷く。彼は池袋を舞台にしたギャングのドラマを、再放送で観たばかりだった。

「何でもいいさ。僕は汚名が挽回出来ればそれでいい。何だってやってやる」

ハカセは汚名返上と名誉挽回をこっちゃんにしながら前髪をかき上げる。

「……本当に……いいんでしょうか……」

「当然！」

屈託のないダンマルの微笑み。ヒナは目をじわりと滲ませながら、深々とお辞儀をした。

「ありがとう……」

こうして、名も無きギャングが結成された。天草が「だったらウ

チのチームに来ないっすか」と進言したが、それは満場一致で断るに至った。

この四人で、四日以内に五千万を手に入れる。ダンマルたちは気持ちを一つにしていた。

泊まる場所を決めて、夜の繁華街を歩く五人。

天草は用事があつて同じ場所には泊まらないが、四人のために道案内をしていていた。

そこでふと、思い出したかのようにフーが議題を提示する。

「ところで、チーム名を決めぬか？　ウチは形から入るのが好きなのでな」

その言葉に、ダンマルたちは顔を見合わせる。

「フーちゃん……天才だな」

「うむ、天才だ」

「そ、そうかの？」

フーは視線を泳がせる。ダンマルは腕を組みながら唸り、

「名前……名前……うーん、やっぱギャングと言ったら池袋だよな。

……湖袋なんてどうだ？」

安易なネーミングを提案した。

「湖がださいわ。却下。どうせなら海……いや、宇宙……いや、神

……神袋なんてどうじゃ？」

フーは得意げに、池を神にまで昇華させる。

「紙袋か……なんかしょぼくない？」

「……カミという漢字を勘違いしてはおらぬか？　神様の神じゃぞ

！」

「なるほど……うーん、でもなあ」

「あの、だったら袋も変えてみたらどうでしょうか……カバンとかに。神カバン……とかに」

ヒナは至つて真剣に、袋をカタカナに変換することを提案した。

「素晴らしいよ菊川、いやピクシーたん。僕は好きだよ、神カバン。神バッグでもいいかもね」

ハカセはどさくさに紛れてヒナの愛称をピクシーにしようと、実は先ほどから必死だった。

「うーん、何か紙パックみたいだなあ、それ」

「君はすこし紙系から離れぬか！」

「そつすよ、ダンマルさんカムバック！」

「紙パック……カムバック……そうか！ アイル・ビー・バックだ！」

「何が!？」

ハカセが眉間にシワを寄せる。ダンマルの目が爛々としていた。

「カムバック……アイル・ビー・バック……アイルランド・カムバック……略してAKB」

「も、戻ってきてくださいダンマルくん！」

一人夢の世界に没入しかけているダンマルをヒナが懸命に呼び戻す。

「いや、でもアリかも知れぬ。AKB……英語は今時でお洒落じゃ」「うん、アイドルみたいでアリかもね。ダンマルにしては……」

「え……本気ですか二人とも……なら、私も……それで……」

「しかし、略称はいいけど僕は略元が気に入らない。アイルランドとか僕関係ないし！」

「それはウチも同意じゃな」

ふむ、と頷き合う四人。AKBが何の略か、という方向に議論は向かっていった。

「略の元……AKB……あなたの、子ども、微妙？」

「ダンマルくん、不吉です！」

「明日は、曇りのち、暴動」

「フーさん、不吉っす！」

突っ込まれたフーはムツとした。本人は真面目に考えていた。

「甘くない、キスは、僕の味」

「黙れ羽方政一。ウチに馬鹿が移る」

フーは氷のような視線でハカセを貫いた。
そんなこんなのやり取りが延々と続いた後、最終的に「熱い気持ち爆発」で意見が一致した。

後に伝説となるギャング、AKB（熱い気持ち爆発）結成の瞬間である。

「ダサいっすね」

ビジネスホテルの手前。別れ際に笑顔でそう言い放った天草に対し、フーが思い切り蹴りを入れた。暴動に続く暴動の後、ダンマルたちの天界生活はようやく一日目を終える。

彼らは知る由もなかった。この四人のうち誰かが、明日消えてしまふということ。

・・2

3

「スーツはよい……じゃが、なんじゃ、そのハートの形をした気味の悪いサングラスは!？」

フーはダンマルの足先から頭頂部までを眺めた後、苦い表情を見せた。目が笑っていない。

「いや、顔を隠すサングラス買って言ったのフーちゃんじゃん!」
「……大体、そのビショビショの髪はなんじゃ。ドライヤーという言葉を君は知らんのか？」

「俺は剛毛だから、勝手にツンツンに立つちゃうんだよ、髪が。シツクに決めるなら濡らしてぺたんこにしないとね。ツンツンだと目立つちゃうから、あくまで目立たないように、さ」

ダンマルは真顔で言っただけ。違法賭場にはドレスコードが指定されているのだ。これから窃盗、あるいは強盗を働く身として、なるべく目立たないようにしよう、というのが彼らの共通認識である。しかしシヨッキングピンクのサングラスは、残念ながら相当目立っていた。

「病氣シツクに決まっておるのは君の頭じゃな。目立ちすぎじゃ、ドあほー！」

怒れるフーは、真つ赤なチャイナドレスだった。ややサイズに対して見栄を張つたらしく、ぶかぶかである。これらの服は天草の情報で、安く買ったたことが出来た。

スーツ一着でおよそ二千全である。この天界においては破格の安さだ。

「僕はどうかな？ ロココ王朝時代をイメージしてみたんだ。ロココって何か分からないけど」

わざとらしく背中を向けながら、ターンをして振り返るハカセ。

白馬の王子様を思わせる全身白。煌びやかな金色の刺繍がところどころに入っており、何故だか当人は薔薇を啜えている。この男に関しては「目立たないようにする」という基本事項を真つ向から破る気満々だった。

「気色悪い。君は一度、ペットボトルと一緒にリサイクルされた方がよいな」

フーは無色の表情を保つたまま、一蹴した。

「おばあちゃんに言いつけてやる！」

「まあまあ、私は、似合つてると思いますよ。その、ギャグ漫画に出てくる王子様みたいで！」

ヒナの必死なフォローは、余計な形容詞によってむしろハカセの心を打ち砕いた。

彼女の胸元が大きく開いた白のドレスは、ウェディングを思わせる。か細い二の腕と、長くスタイルのいい足回り。巨乳が強調されており、多くの男たちがその壮麗な雰囲気雰囲気に視線を奪われていた。髪は後頭部で渦巻き状に結わえられており、お団子のようにになっている。悪霊という階級をまるで感じさせない、高貴な振る舞いとなっていた。少なくとも一番まともである。

「皆さん、お揃いのようっすね。似合つてやすぜ。ハカセさんとか、ギャグみたいな感じで」

賭場近くのビルの前。執事のような格好で時間通り、十九時に現れたのは天草である。七対三の前髪が、ここに来て執事系スーツに映えていた。ただし顔の気持ち悪さに変化はない。

「あれ、ダンマルさん、その袋はなんでございやす？」

「ああ、これか。この中にはな、」

ダンマルは数本程度の棒が入りそうな真っ白い袋を背負っていた。「夢が詰まっているんだ！」

五人は難なく潜入に成功する。この違法賭場にはカジノや闘技場がある他、麻薬や売春などの裏取引のための個室が完備されていた。全体的に薄暗く、外の光なんてまるで届かない地下施設。スーツやドレスを纏った高貴そうな人間が蔓延っており、彼らの約三分の一はマフィアやヤクザ等、その手の者だった。高貴でありながら、殺伐とした場所である。

「ふむ……本当にあるとはな。ウチも考えを改めねばならんようじや。やはり、外は広い」

視線を鋭くして周りを見渡すフー。閻魔配下の立場としては、こういう犯罪的な施設に対して怒りを露わにしてもよさそうなものだが、むしろ内心でウキウキしているようでもある。

「時間まで結構ありやす。固まるのはマズいので、適当にバラけて欲しいっす。脱出ルートも確認しといて欲しいす。拙者は先に会場の下見をしてきやすんで。あ、作戦、覚えてやすか？」

「当然だね。『何事もメモをとれ』。お婆ちゃんの知恵袋の一つだ」
早々に薔薇を胸ポケットにしまった八カセは、偉そうに答えた。
ちなみに彼は手帳を買い忘れたのでメモってはいない。

作戦というのは、『草薙の剣ゲットだけ作戦』のことだった。

まず手慣れている天草が下見をし、隙あらば爆弾を闘技場のVIPルーム付近に仕掛ける。VIPルームにはクランクが座しており、草薙の剣もそこにあるはずのことだ。VIP個室はガラス張りになっていて、その付近に観客席はなく、爆発させても被害はない。

草薙を手に入れるための手順は比較的簡易だ。勝者に草薙が贈られる寸前に混乱を起こし、どさくさに紛れて奪い取るというものである。二段構えの陽動で、ダンマルたちはこれに臨む。

なお今回、賞品価格が一億という凄まじいものである故に、バトル参加費は百万全という甚大なものだ。今宵はそのうち予選を勝ち抜いた十名が『化け物』に挑むことになっている。

しかし今大会においては「勝者なし」が十分に有り得るという話だ。クラークからすれば草薙を獲られたくないのだろう。予選通過ランクの低い者から順に化け物に挑み、勝てば賞品、負ければ普通に帰宅、しかし死ねば全財産剥奪、という契約が事前に結ばれているそうだ。

「えげつないっすよ。死ねば天啓剥奪つてのが如何にもクラークらしいですぜ。予選参加者の参加費で既に草薙分の天啓は稼いでいるはずなのに、まだまだ吸い尽くす気といいやすか」

つまり、クラークは参加者の財産を狙い、皆殺しにする可能性が高いということだ。草薙をエサにして一人でボロ儲け、観客も残酷ショーを望んでいるため一石二鳥なのである。

しかし天草は言う。普通に考えれば勝者なしになりそうだが、今回に関しては必ず勝者が現れると。参加者の中に、裏試合五年間無敗のとんでもない悪霊がいるらしい。お宝目当てで大会に気まぐれで参加し、出た試合全てで勝利を刈り取る、ストッキング・マスクの男 名を『ストッキング・ラヴァー』という。今回、彼が十番目の参加者として、参戦するようだ。

「奴は必ず化け物を仕留めやすぜ。いいすか？ 拙者がハイパーはいぱいで得た情報によれば、クラークは草薙を渡す前に闘技場中央で、覚えたての手品を披露するらしいす。その手品中に、拙者たちで草薙を強奪しやす。ストッキング・ラヴァーの手に渡る前に」

以上が、作戦の全貌だった。なお脱出に関しては、スモークを焚いた上でさらに別の爆弾を起爆し、他にも爆弾があることを示唆した上で、逃げ惑う者たちに追従してどさくさに紛れて逃亡、という

作戦を用いる。裏の世界故、公的警察機関の介入はない。

「じゃあ、失礼しやす。一時間半後、二十一時にロビー集合で」

「任せておけ。今の俺は任務を忠実にこなすエリート・ギャングだ」
バラバラに行動を開始した。固まらないようにすることに加え、
出口に繋がるエレベーター、エスカレーター、非常階段の場所をそれぞれが確認していくためだ。

「気合いを入れるぜAKB、『草薙の剣ゲットだぜ作戦』開始！」

「その作戦名何とかならんか？」

ダンマルの行き先は決まっていた。エレベータでもエスカレーターでもない　カジノである。

「　で結局、賭けビリヤードで三万スツたのさ。玉突き事故起こしちゃった的なね！　てへ」

「この救えないドあほー！　ウチが、その双眸にキューで玉突き事故を起こしてやるうか!？」

仕事を放棄してカジノで遊び尽くしたダメ人間の末路だった。哀れなダンマルである。

「情けないねダンマル。カジノは勝ってなんぼだろう？　ですよね、おばあちゃん！」

一方、ばさり、と赤いマントを翻すハカセ。背に白字で「神」と書いてあった。

「ハ、ハカセくん、それ、」

「ふふつ、そうだよ、カジノの景品さ！　僕つては視力は悪いけど、動体視力は学園一を自負しているからね！　加えて超絶的反射神経！　スロットなんてチョロいね、ボロ儲けだよ！」

ハカセは得意げに鼻から息を飛ばした。事実、彼は本当に動体視力がいい。

「あの……それ……多分、ファンドシです……」

しかしヒナが恐る恐る指さす。彼が羽織っているマントは、確かにファンドシの形をしていた。

「……………」

「よっ、フンドシ神！ 背中に神って書いてあってカッコいいな。ちよっと腰に巻いてみるよ」

「ち、違う！ これはマントだ！ 赤いのが何よりの証拠だ！ マントは普通赤いもん！」

「どうでもよいが……緊張感のない奴らじゃのう……んぐ」

フーは何故か大きな箱を片腕で抱えており、上部を開いて、その中に入っているホールケーキを素手で摘んで食べていた。彼女もまた緊張感がない。ダンマルが不審そうに目を細める。

「っていつか、それおいしそうだねフーちゃん。ちよっと俺にも頂

……………」

「や

「…………ぐっ。フーちゃんばかり子どもみたいにボロボロ溢しながら食べてずるい！」

「なっ！？ だ、誰か子どもじゃ！ 無礼じゃぞ！ そ、それにウチは別に、ボロボロだなんて」

叫びながらボロボロとスポンジを部分を溢すフー。口元がクリームで真っ白だった。

「くっ…………もうよい！ しまっ！ 後にする！ 君が見ていない時に必ず食うからの！」

彼女は不機嫌そうに、まだ半分以上残っているホールケーキを残したまま、箱を閉じる。

そしてそれを「持って」とばかりにダンマルに押しつけた。

「…………まあ、いいけどさ。ちなみにこれ、どこでゲットしたんだ？

フーちゃん」

「あの者に貰った。ウチの美貌も満更ではないようだのう」

フーが示す方向には、顔中傷だらけで眼帯をした中年男性がいた。ダンマルを睨んでいる。

「フーちゃん…………お兄さん、友達は選んだ方がいいと思うなっ」

「安心するがよい、むしろああいう輩がウチのタイプじゃ。洪くて

後ろ暗くて、イカつい」

「フーは危ない路線が大好物だった。男性から謎の殺意を受け、ダンマルは汗だくになる。」

「ふふっ……人気者ですね、ダンマルくんも、フーさんも」

やり取りを見て、ヒナがくすくすと笑う。彼女は彼女で白い袋のようなものを抱えていた。

「あれ？ その荷物……ヒナもカジノを？」

「へ？ 違います、違います。これはですね、名刺ですよ。なんだか皆さん、いっぱいいくれて」

彼女はただのモテモテだった。

「ふん……悪霊であることを名乗っておいたら、そうはならんかったじゃろうな」

何故かフーがふてくされる。

「そう、ですね……そうだと思います」

「そんなことないさ！ 何故ならユー・アー・ピクシー！ ピクシーとは僕が大好きな愛らしい妖精のことなんだけど、旅人を踊らせたり、チェンジリングを行ったり、悪い一面も持っているんだ。僕が何故、そんないたずら妖精を愛し、同時に君の源氏名としたか分かるかい？」

「分かりたくもないわ。というか、いきなり何なんじゃ君は……うざったい……」

テンションが異様に高いハカセに対し、フーが冷たく答える。

「お前には聞いていない！ ふっ、つまり、ピクシーとは僕がネットゲームで惚れた女の子のハンドルネームだったんだよ。そしてその子の性格が菊川さんに似ていた……そういうことさ」

ハカセは明後日の方向から解答を示した。

「悪い、フーちゃん、結局ハカセは何の話をしているんだ？」

「頭の病気の話じゃろ。あほが移るから目を合わせぬ方がよいぞ……って君もあほじゃったな」

肩を落とし乾ききった苦笑を漏らすフー。突然、彼女は思いつい

たよりに顔をあげると、

「ああ、ネットゲームで思い出したわ。そういえば、言い忘れておった。電話やネットゲームなどの通信系統は、厳しい条件を満たせば現世・天界間でも繋ぐことが出来るのじゃ。現世通信偽装と言つてな。案外、羽方政一が惚れたその相手というのは、天界の者かもしれんぞ？」

「な、なんだつて……？」

ハカセが目を丸くした。

「じゃあ、僕は死んだけど、ナグナレクオンラインのフェンリム鯖にはまだログインが出来ると！？ 条件を教えてください！ 現世と同じIDを使えるのか！？ 僕の『りんごちゃん』のハンドルネームは有効か！？ まあ、この際一からでもいい、いや、待てよ、現世のネットに繋げるのか！？ 繋がるなら僕、愛すべきお絵かきチャットの皆に別れを告げない！」

物凄い剣幕である。フーは「おおっ」と唸りながらされるがままに揺さぶられていた。

そこで、ゴトンと何かが落ちる音がする。

ダンマルが振り返ると、そこには青ざめた天草が立ち尽くしていた。

「おー、遅かったな」

「い、いや……そうっすね。え、えっと……オホン、準備出来やした、闘技場入りやすぜ！」

遅れてやってきた天草は狼狽えながら言葉を紡ぐ。四人は頷き、一步を踏み出した。

「いよいよですね……緊張します。上手く行くでしょうか？」

ふわりとドレスに風を含ませながら、ヒナが深呼吸をする。

「安心しろよヒナ。俺は一度だって、他人に敗北したことがないからな！」

既に髪が乾き、ツンツンに戻っていたダンマル。昨晚の敗北はなかったことになっていた。

「おいおい、甲子園予選で敗退し……痛い！ くそつ、お婆ちゃんに言いつけてやる！」

ダンマルに尻を蹴られ、顔を真っ赤にするハカセ。

「よし……さつさと終わらせてケーキを食すでしょう！ 楽しみじや！」

フーの頭の中にはケーキのことしかない。

「途中でバラけたら、落ち合う場所は駅前ですぜ！ それじゃあ……作戦開始っす！」

「レディース、エーンド、ジェントルメーン！ 今宵もやって参りました不定期開催、リアルタイム・デッド・ゲーム！ 宝に眩んだ命知らずどもが、鮮血を奏でる殺戮ショータイム！ 皆さん準備はよろしいですか！？ デッド・ゲーム・スタンバイ。ヒュイゴウ！」

耳を突き破るような爆音が、地下二十階、直径五百メートルの半円スタジアムに反響する。必然、気温は高くなり、辺りはアンダーグラウンド特有の普通ではない熱気に包まれる。

ダンマルたち四人は隔離されたVIP席になるべく近い位置で、なおかつ最前列に座していた。天草に関しては他の準備のために別行動を取っている。

座席は闘技場中央にいる司会の位置から六メートルほど高い位置にあり、戦闘の様子を見下ろす形だ。柵はなく、飛び降りれば乱入出来そうな作りは演出のためとされ、万が一乱入すれば即座に射殺される仕組みになっていた。防弾ガラスに覆われたVIP席を守るようにして、ライフルを構えている二人のSPが、その役にあたる。「天草太郎がVIP席付近を爆破し、SPを引きつけている間がチャンスとなろう。草薙強奪はウチが行うむぐ。菊川雛瀬と羽方政一は逃走ルート確保、桶狭間弾丸はウチの援護を頼むぐ」

確認するようにフーが言う。無料配布のポップコーンを貪り食っていた。

一方、ダンマルは自分の役目が援護だということに、納得がいつ

ていない様子だ。

「なあ、フリー、ここはやっぱりエースの俺が」

「戯け者むぐ。ウチと君では鍛え方が違うむぐ。君に銃弾を見切つて躲すことが出来るむぐ？」

「銃弾は無理かな。けど、数学の問題を生徒に解かせようとする、先生の視線を見切つて躲すのは得意だったぜ。あと、歴史の授業そのものを見切つて躲して屋上で昼寝したり、とかな」

「へらへらと軽口を叩いている場合ではなかるう？ ……むぐむぐ」

「もしかもしかとポップコーン食ってる場合でもないだろ！？」

むぐつ、と額に汗を浮かべながら、フリーの右手が停止する。ゴクンと飲み込み、

「わ、分かっただけおるわ！ ちょっとした洒落じゃ。そ、それにしても、酷いギャンブルじゃな」

彼女はポップコーンを置いて、代わりに手元にある賭博コンソールを手に取りながら嘆いた。

タッチパネル式で『ガウン』をベットし、送信すると、結果次第でガウンが上下するという仕組みである。ガウンとはギャンブル貨幣であり、百全、一ガウンで双方向に変換が可能だ。

「そうですね……………なんだか、嫌な気持ちです」

ヒナも頷いてみせる。問題は、デッド・ゲームの賭け対象にあった。死亡と生存の二択で賭ける形式、誰が生存するかを賭ける形式、死亡前提で何秒間耐えられるかを賭ける形式、死亡時にどういう状態になっているかを賭ける形式。死んだものが何に転生するかを賭ける形式。

命を賭けの対象にするという悪趣味な遊戯。フリーやヒナが気分を害すのも当然だった。

「こんなもので賭けをする者の気が知れぬ」

「え、俺賭けちゃったんだけど……………」

がばつと、眉を八の字にしながら、信じられないといった様子でフリーがダンマルを見た。

「君にプライドはないのか桶狭間弾丸!? 見損なつたぞ! 命のギャンブルに手を染めるか!」

「いや、その」

「九名死亡、最後の一名のみ生存……に賭けたのか? くそつ、確かに当たるじやろうが、胸くそ悪い話じゃ……! ええい、こんな大会、本当は潰してやりたいというのに……!」

「いや、だから……っていうかフリーちゃん、シブくて後ろ暗くてイカつい系が好きなんじゃ?」

「どちらかといえば正義のヤクザ者を好んでおる! 黙れ、ウチに話かけるな小悪党!」

散々言われるダンマルだった。

「……………ダンマルくん、何に賭けたんですか?」

ヒナが剣呑な眼差しでダンマルを睨んでいる。

「いや、だから……………『全員生存』に百五十ガウンを……………」

「……………は?」

沈黙が流れた。こいつは何を言ってるんだ、という視線が各方面からダンマルに刺さる。

「真性の阿呆か? 今日の『化け物』が何だか聞いておらんかったのか? 天草の話聞いておらんかったのか? 絶対に勝てぬ

ストッキング・ラヴァーですら危うい最悪な怪物じゃぞ! そもそもモクラークは一人たりとも参加者を生かす気なんぞない!」

だから死亡前提の賭けが成立するのじゃ! と、フリーが怒声を上げた。

「分かってるつてば。だからこれは、応援みたいなもんさ」

そんなフリーを一切気にせず、ダンマルはしれっとした調子で返した。

「……………応援じゃと?」

「そう。全員生きて帰れますようにって。そういう意味で賭けたんだ」

「……………一層くだらぬ。ウチはそもそも参加者の味方をしたいワケで

もない。参加者、主催者、観戦者含め、この歪んだ現状が気に入くないのじゃ。参加者として金に欲が眩んだ自業自得。その生存を願うために、わざわざ百五十ガウンじゃと？ 待て、君の残り天啓はいくつじゃ？」

「ん？ カジノで三万全すつたから、あと百五十全くらいだな」

「おにぎりしか買えぬわ！」

頭を抱えるフーだった。「これほどまであほだったとは……」などと、ぶつぶつ言っている。

「……ふふっ」

そんな様子に、ヒナが思わず笑みを溢した。ダンマルは首を捻る。

「ダンマルくんって、バカですね」

「うええええ!?!」

ヒナの予想外の毒舌。ダンマルに物凄い旋律が奔った。ハカセがその通りと頷く。

「別に俺はっ」

「お待たせしました！ 一人目の挑戦者、安藤翔あんどうしょうた太選手の入場です！」

ドツと沸く歓声に、ダンマルの自己弁護は打ち消される。闘技空間は円形であり、西と東に巨大な鉄の扉があった。そのうち西側が突然開き、中から小柄な少年が出てきた。

「え、子ども……?」

「見た目で判断するでない。この不老世界において、外見の若さは何の参考にもならぬ」

四人は少年を見下ろす形で凝視した。フーと同じくらいの小柄な身長に、ふわりとした茶毛。目尻の垂れた大きめの瞳からは、緊張の色が伺える。規定により、防具は繊維系素材、武器は直径一メートル以下の近接タイプに限るという指定があるのだが、この少年はその規定の限界を指しているような、そんな格好をしていた。ぎりぎり一メートルの巨大な両刃剣は身長に釣り合っておらず、何枚も重ね着したであろう皮のジャケットは太って見えて滑稽だった。

必死さがひしひしと周りに伝わる。絶対に勝つという意気込みだけは一人前のようだった。

「強くは見えないけどな……なんか、真剣なのかふざけてるのか分からねえ格好だし」

「そんなダサイサングラスをかけた君にだけは、言われたくないだろうな……同情する」

「そーして！ 今宵の殺戮者、ニズ・パツカード社の新作！ 『ティラノ・エオラプトル』！ ティラノサウルスをモチーフにした二五メートルの肉食獣！ あらゆる刃物を通さない鋼の鱗に、鉄をも噛み砕く強力な顎！ 草薙を守りし古代の王者、ついに登場です！」

アナウンス。少年、安藤翔太の時とは比べものにならないほどの歓声が反響する。安藤は姿勢を低くし、剣を構える。同時に、東の扉がガラガラと音を立てて開いた。その奥で蠢く陰。ざらりと獲物を狙う鋭い視線。研ぎ澄まされた野生の感覚。

ティラノ・エオラプトルが、低い呻きを漏らしながら、その茶色の図体を晒した。

「きよ、恐竜……！？ う、うそだろ、そんなもんまでいるのか！ ……つて？」

そこまで叫んで、ダンマルは「あれえ？」と首を捻る。あまりにファンシーだったのだ。チワワのようにくりくりとした瞳に、三頭身のぷっくりとした頭と身体。モンスターをボールで捕まえるゲームに出てくる、とある炎属性のは虫類の姿がダンマルたちの脳裏に過ぎる。

「君はやはり対戦する化け物について聞いてなかったのだな……むう、しかし、可愛いのうち」

「現実味なさすぎだろアレ！ あれのどこが化け物！？ うわ、なんか尻尾振ってるし！」

「可愛いです……じゅるり」

顎が外れる程に大きく口を開いてうつつとりするのはヒナだった。

「見た目に惑わされるな。あれもクラークの狙いの内じゃる。実際

は超凶暴なはずじゃ」

「おいおい、あんな可愛い生き物が凶暴なはずないだろ！」

「しかし、一億の草薙を守らせておるのじゃぞ？」

「けどあんなの、剣があれば俺でも倒せそうだぜ！？」

二・五メートルは予想以上に小さい。おまけにとろそうであり、ダンマルでも勝てそうだ。

「おーっとお！ テイラノ・エオラプトルが行ったあーっ！」

そして闘技は突然に始まった。獲物を定めたテイラノ・エオラプトルが、見た目にまるでそぐわない凶暴な雄叫びをあげ、猛然と安藤に突進する。安藤はしばらく硬直していたが、振り切ったように大声を上げて、右に跳んでそれをぎりぎりで躲した。

ドン、と会場が大きく揺れる。恐竜の頭突きが、壁にヒビを入れた結果だった。

「うおお！？」

「ほらの、凶暴であろう？」

「……マジか」

はは、とダンマルの乾いた声。引きつった笑み。揺れは間違いなく本物だった。

「テイラノ・エオラプトルの最大の特徴は突進攻撃にあります！可愛く見えて最大時速は三百キロ、堅牢な身体で相手を弾き、倒れたところを捕食する！ ちなみにご安心ください、テイラノ・エオラプトルは跳んだり跳ねたりしません！ 皆様の安全は保証されます！」

司会はいつの間にか、フィールドからいなくなっていた。テイラノ・エオラプトルと入れ違いで出て行ったのだらう。北口にも、人間が入り出来る程度の小さな扉があった。VIP席では、クラークが愉しげに闘いの様子を見下ろしている。

「なあ、なんかやばいんじゃないか……？」

「ふむ。とはいえ、彼も予選を通過したのじゃ。一番手とはいえ、それなりに強いはずじゃぞ」

「そつか、そうだよな……食われるってことは、ないよな」
「ぐあぁっ!？」

ダンマルが安心したと同時に、安藤が悲鳴を上げた。ティラノ・エオラプトルが大きな口を開けて追撃、安藤の剣を易々と噛み砕いたのだ。ゾツとする光景が広がっていた。安藤は丸腰である。怯えながら後退する彼に対し、ティラノ・エオラプトルは捕食すべく、容赦なく近づく。

「ちょ、ちょ、おい! それなりに強いだって!? やっぱただのガキじゃん! やばいぞ!？」

「……………ふむ」

「おい、何落ち着いてんだよ、ガキだぞ!? ふざけんな、あのままじゃ食われるぞ!？」

ダンマルは声を大にする。その叫びと同時に、安藤が斜め前方に飛び込んだ。先ほどまで彼がいた位置に、ティラノ・エオラプトルが食らいつく。フィールドには障害物も何もない。ただ、地下とは思えない茶色い自然の大地が広がっているだけだった。

グルルル、と唸る愛くるしい恐竜。安藤は息を切らしていた。もはや丸腰である彼には万に一つの勝ち目もない。ただ、食されるのみだ。

「ギブアップとか出来ないのか!？」

「……………出来ぬ、と天草太郎が言っておった」

「ちくしょう、どうにも出来ないのかよ!？」

ダンマルが叫んだところで状況は変わらない。ティラノ・エオラプトルが安藤に狙いを絞り、喉の奥が見えるほどに顎を全開にして、バクン、と上下の牙を摺り合わせる。

安藤はそれを間一髪で避けるが、勢いよく水平に振られた恐竜の頭部によって追い打ちをかけられ、大きく弾き飛ばされた。壁に衝突し、頭から血を流して 気を失う。

「腕でガードしたか……………しかし、意識が飛んだようじゃな。となれば……………」

もはやこれまでか、とフリーが呟く。同時に、唇を強く噛みながらダンマルが立ち上がった。

フィールドでは、倒れて動かない安藤を噛み千切るべく、恐竜が巨大な口を開いたところだ。

「ああああ、もう！ やめろつつつてんだよぉーっ！」
突然。

宇奈月学園のエースが、白い袋の中から硬球を取り出し、風を裂くように投擲する。

スムーズなフォーム。四肢がしなやかに伸びる。狙いは正確。距離による失速はない。弾丸の如く撃ち出された白い球体が、ティラノ・エオラプトルの後頭部に衝撃を与えた。

「ばっ……」

「目の前でのスプラッタを許せてか？ ざけんな！ この俺が相手だ！」

間髪入れずダンマルが叫ぶ。多くの観客が彼に注目した。ハート型サングラスのせいであだの不審者だったが、彼は一切気にしない。スーツを脱ぎ捨て、バットを取り出し、そして。

彼は、跳んだ。

「ば、馬鹿者！ 一体何を！？」

「そうだ、しまった……あのアホはあーいうヤツだった！ ダンマルは後先ってヤツを考えない馬鹿野郎なんだよ！ 命令なんてクソ食らえ、野球の予選で負けたのだから、あいつが監督の指示を無視してストレートをど真ん中に投げ続けたからなんだよ！ 敬遠さえしなかった！」

ハカセが取り乱したように叫ぶ。フリーは小さく舌打ちをした後、ハカセを置いてダンマルに続いた。その際に、チャイナドレスの胸ポケットからサングラスを取り出すことを忘れない。

「って、行っちゃうのか、フリーさん！？」

衝撃を吸収するようにして綺麗に着地したフリーを見下ろしながら、ハカセは固まった。そもそも、この高い位置から飛び降りるだけで

も、相当に勇気がいることだった。

「……おばあちゃん言葉の思い出すんだ羽方政一。確か……そう！」

拳を震わせ、深呼吸。ハカセは瞳に決意を宿し、言葉にした。

「何事も、一歩退いて遠くから見てみる……つまりこの場合、」
真っ直ぐな気持ちで、遙か下方にいるダンマルの背中を見る。

「僕は遠くから見守ろうじゃないか……！」

単に度胸のなさを正当化しただけだった。

「おーっと、これは乱入者！ 久しぶりの事態です！ えーっと、なになに？ こいつはラッキー！ 彼らは銃殺ではなく、噛み殺しの刑でいいとのこと！ 主催、クラーク氏、絶対の自信！ 賭けにはなりません、ちょっとしたショータイム！」

司会が場を盛り上げる。そんな中、ダンマルは着地に失敗して足を痺れさせていた。

「このどあほー！ ……はあ。君の間抜けぶりからは、逆に学ぶものがありそうじゃ」

「つつう……学んだところで、間抜けになるだけだぜ」

綺麗に着地したフーの手をとって彼は立ち上がる。怒っているのか、ティラノ・エオラプトルが可愛らしくも鋭い眼差しを向けていた。やれやれ、とフーがため息を吐く。

「その手に持つてるのはなんじゃ？」

「バット。ギヤングと言ったらバットだろ？ だからスポーツ用品店に行ったんだ。俺、もう野球卒業したからさ。いつそ武器にしよるか？」

「スポーツマンシップの欠片もないな」

「俺ピッチャーだし、バット振るのにプライドなんかねーよ」

「ボールを恐竜にぶつけていたようじゃが？」

「デッドボールの文句なら審判に言ってくれよな」

フツと笑う二人。無駄話は、それで終わりだった。ティラノ・エ

オラプトルが狙いをダンマルに絞り、獅子奮迅の勢いで突撃する。
しかしダンマルは 逃げない。

「ジャストミートツ！」

迫り来る恐竜の頭部にタイミングを合わせ、彼はバットを振り抜いた。

が、しかし。

「……へ？」

ティラノ・エオラプトルの強靱な体躯により、真つ二つに折られてしまう、無残なバット。

「バ、バカなあつ！？」

「バカはお前じゃー！」

フーはダンマルの手を引き、すかさず腕力にものを言わせて投げ飛ばした。ダンマルからすれば意味不明だったであろうが、それはダンマルを逃がすためのフーなりの一手だ。彼女は予備動作を最小限に整え、間髪入れずにクナイを数本投げ放つ。

「……ふん、どうしたもののか」

しかし、刺さらない。予想以上にティラノ・エオラプトルの鱗は固かった。フーの装備はクナイのみであり、ダンマルの装備は折れたバットのみ。既に死亡フラグが立っているようだ。

ティラノ・エオラプトルが、フーを狙って突進する。彼女がそれを左に躲したところで、

「あんたらはどれだけアホっすかあーっ！」

突然、ティラノ・エオラプトルの背中が爆発した。

時限式爆弾。手榴弾の類を投げ込んだのは、覆面で顔を覆った天草太郎その人だった。

同時に、VIPルーム脇も爆ぜ上がる。衝撃によって防弾ガラスが破裂し、光を反射しながら軽やかな音を響かせる。二人のSPがライフルを構え、驚くクラークの元へ駆け寄った。

「天草太郎！？ ……予定を早める気か！」

「じゃなきゃあんたらは死んでやした！ っていうか無理っばいっ

すよもつ、ああ、最悪だ！」

天草は観客席から声を荒げつつ、手榴弾タイプのスモーク弾をあちこちに投げつける。すぐに煙が充満し、会場は混乱した。悲鳴とともに立ち上がる人々。観客席でハカセ同様何も出来ずにいたヒナも立ち上がり、事前に天草に貰っていたスモーク手榴弾を真下に転がした。

「……………ここ、は？」

「あいたたた……………おつす、坊主」

一方フィールドでは、フーに投げ飛ばされたダンマルが、安藤に重なっていた。一瞬気を失っていた安藤は、現状を理解出来ずに目をしばしばさせる。彼はとりあえず、「あ、どうも」と律儀にダンマルに挨拶をした。

ダンマルは飛び起き、転がっている折れたバットを見てため息を吐いた。爆撃を受けて倒れたテイラノ・エオラプトルに視線を移した後、遙か上、VIP席を見上げる。

「とりあえずお前は死なずに済んだ。良かったな。命を大切にしてくださいとさっさとここから逃げろ」

まるで安藤が自分より年下であるような雰囲気、ダンマルは優しく告げる。

「あれ……………恐竜が倒れて……………え、あれ、貴方がやったんですか!？」

「ん？ いや、まあ……………そんな感じだ!」

投げ飛ばされていた彼は、実際状況をよく飲み込めていない。ノリで自分の手柄にした。

「くっ、殺せ！ 待機部隊、テロリストどもを射殺しろ!」

VIP席で、SPに守られながらクラークが声を荒げていた。命令に従い、別の階に待機していた私設警備部隊がぞろぞろと観客席あるいは北の扉を超えてフィールドへ投入される。スモークの効果で視界が悪いが、それはお互い様なのだった。

「ここに用はない！ 桶狭間弾丸、観客席へ行くぞ、ついてこい!」
「お、おう、そうだな!」

遠くで叫ぶフーに促され、ダンマルは頷く。安藤はきょとんとしていた。

「させん！ 死ねいテロリストども！」

同時に、九人くらいから銃口が向けられる。「やば」と脳天気な眩きがダンマルから漏れた。

そんな時だった。

「いやほんま死ねって思うたわ」

突然、銃を構えていた男の首筋から血が勢いよく噴き出す。開け放たれた西の扉より突然現れたその男は、真っ黒なマントを羽織っており、ストッキングを被っていた。

「人が楽しみにしとった獲物、爆破しよってからに……なあ？」

羽が生えたかのように軽やかなステップ。体軀をしなやかに動かし、二人、三人と潰していく。錬磨されたその動きは人間離れしており、リーチとして優位に立つはずの銃を、まるで子ども扱いする。圧倒的なその存在感に、ダンマルもフーも、見とれてしまっていた。ただし、男はストッキングを被っていた。

「ま……これも縁やる。僕、ほんまは君ら斬るつもりやったけど、まさかそれが君らやと思わなかったし、今回は気分で味方しといたるわ。ええ感じにスモーク立ち上ってるしなあ」

一瞬だけストッキングを下から捲り、男は顔を見せた。リーゼントではなかったが、それは紛れもなく昨晚ダンマルたちが出会った賞金稼ぎ、花鳥風月だった。

「あんだ……」

「ハイハイハイ！ そこまでそこまで。全員動くな！ 主催クラーク・ゴールド、及びそれに与する者、関与する者、ゼーンぶまとめて逮捕しちゃうぞ！」

そこでさらに状況が一転する。突然現れたのは、水色の和服に身を包んだ男たちだった。

その中でも自信たっぷりに声を出すリーダー格の男は、恰幅のいい肉体とアフロヘアのせいにか相当に目立っている。やや離れた細

い目と低い鼻。整った顔立ちとは言い難い。

「うわ、タイミング最悪や。ありえへん。なんで天警がこんなところおんねん……」

「天警？」

「天界における警察のことじゃ。ふむ、違法賭場を潰しにきたようじゃの。しかし……本当に最悪のタイミングじゃな」

「や、やばい感じ？」

ダンマルはフーの元に駆け寄りながら言う。安藤もそれに続く。天警に所属する男たちは全員観客席にいた。フィールドにいた私設警備団は狼狽え、狙いを天警に切り替えて銃を構える。

「捕まればウチらとて牢獄じゃ。なんせ、テロリストじゃからの」
それを聞いたダンマルの顔は、青ざめるところか明るくなる。

「なんだ、売名チャンスじゃん！ 賞金首としての価値が上がる気がする！」

「馬鹿め。天警に睨まれていいことなんぞあるか。私的に懸賞金を懸けられる分にはよいかもしれぬが、公的に狙われたら終わりじゃろう。顔がバレたら指名手配じゃ」

「なら、素顔がバレなきゃいいんだろ？」

「まあ……それはそうじゃが……そうじゃな」

サングラスをつり上げる二人。あーあ、と頂垂れる花鳥。安藤は相変わらず状況を掴めずにいるようだった。スモークの中、天警に属する者たちが観客席から飛び降りる。と同時に、さらにやかいな化け物が目を覚ます。ティラノ・エオラプトル 背中は、無傷だった。

「……おいおい」

グルルル、と呻きながら起き上がるファンシーな恐竜。天警、私設警備団両者は気圧されつつも、手に持った銃を真っ先にその怪物へと向けた。恐怖にかられ、誰かが撃った。弾丸がティラノ・エオラプトルの鱗の表面に突き刺さる。しかし、それだけだった。

その堅牢な鱗を貫くには至らず、怪物は倒れない。ただ、余計に

怒りを買っただけ。

「ひいつ」

怯えた声。私設警備団の一人が尻餅をついた。興奮しているティラノ・エオラプトルは、その瞬間を見逃さない。後ろ足の筋肉をしながらに駆動させ、爆ぜるように地面を蹴り、首を伸ばして食らいつく。声にならない悲鳴は、男の上半身が千切られた時点でなくなった。

「うえっ……グロ……ま、まじかよ……お、俺はあれにバットで挑もうとしたのか」

「この光景を前にして、それだけ軽口が叩ければ十分じゃ。……西の扉から逃げるぞ！」

「せやな……こんな三つ巴どころか四つ巴の戦い、パスやわ」

三人が頷くと同時。さらに状況は面倒なことになる。

「おおおおおあいたあああつ!?!」

物凄い絶叫とともに、六メートルの高さから飛び降りてきた男がいた。緩く縛られていたフンドシマントが空中で外れ、彼の後を追ってヒラヒラと落ちてくる。少女 箱を持ったヒナを抱えたまま死にそうな顔をしているのは、白のスーツに身を包んだハカセだった。

「ハカセ!? なんで降りてきた!?!」

「い、いや、地味に上で銃を持った人たちに囲まれて……もはやこうするしか……」

「無駄口は終わりじゃ! 来おつたぞ!」

「あれ!? 恐竜生き返ってないかい!?!」

実はハカセはヒナとともに、銃声が飛び交う中で観客席から逃げ延びていた。彼は決断力と勇気が足りないものの、反射神経、及び動体視力がいい。加えて状況判断力もあつた。生き延びたのは偶然ではない。彼は無意識のうちに奮起し、生き延びることを目的として奔走し、ヒナを守るべく抱えて飛び降りたのだ。彼は跳ぶまで無言を貫き、フィールドの現状に気付かないほどに集中をしていた。

その右手には、ダンマルが用意した二本目のバットが握られている。「んにやるう……！」

天警の者たちの弾丸を浴びながらも、ダンマルたちの方へ向かってくるティラノ・エオラプトル。フーはクナイを投げつけるが、恐竜はそれを器用に躲した。「貸せ！」と叫んでハカセからバットを奪い取ったダンマルは、第二打席に登板、先刻同様にフルスイングをかました。

バキイ、という絶望的な音とともに、思い切りそれは粉碎した。

「ちくしょーまたかよ！」

「いい加減学ばんか、この、どあほー！」

しかし、今回は効果があった。割れたバットの木片が爆ぜ、恐竜の目に刺さったのである。緊急停止し、呻きを上げる怪物。逃げるためのチャンスが到来した。

「今じゃ、西の扉に向かって走れ！ 銃弾は気にするな！ スモークを信じるんじゃ！」

「わ、分かってる！ あ、そうだ、お前も来いよ！」

ダンマルが手を差し伸べた相手は安藤翔太。最初に恐竜に挑んだ小柄な少年だ。

「あ、あの、ハカセくん、ありがとう。もう、大丈夫だから。……行きましよう！」

「え、うん……あ、ちよつと待ってくれよ！」

ハカセに抱えられたままだったヒナは地に足をつけ、疾駆する。

一方、ハカセは慌てていた。外れたフンドシマントを拾うため、少しでも時間を浪費し、それが仇となる。

再び体勢を整えた恐竜が、ハカセに狙いを定めたのだ。

「ちよ、ちよ、ちよおおーい!?」

ティラノ・エオラプトルの突進攻撃。今回は唾液を垂らしながら口をあぐりと開けており、そのまま彼を食い破る勢いだった。突然のことに、ハカセはパニックに陥る。陥った拳げ句、

「う、うおおおおっ！」

赤のフンドシを、闘牛士のようにヒラヒラと構えた。

この恐竜を闘牛のように扱えるかは定かではない。だがしかし、幸運なことにティラノ・エオラプトルは姿勢を低くし、その布に向かつて頭突きを放ったのだった。

「そおおおいやあああつ！」

翻す。恐竜は勢い余って壁に衝突し、大きく怯んだ。チャンスとばかりに、ハカセは走る。

「何やってんだよハカセ！」

「うるさい、こっちは、三途の川を渡りかけていたんだよ！」

「我々は天警だ！ 君たちも関連者と見なして捕らえる。大人しく武器を捨てる！」

「捨てるんは己のプライドだけで十分や！」

邪魔する者は全て斬る。ストツキング・ラヴァーに扮した花鳥風月を筆頭にして、ダンマルたちは全員フィールドを離脱した。

「くそつ……くそおつ！ 何故だ、何故ここが分かった……！！！」

「善良な市民からの通報があつてねえ。ま、どうでもよくね？」

アバウトに切り返す天警のリーダー格の男。彼は闘技場からやや離れた区域で、クラーク・ゴールドを拘束していた。短い眉とアフロ、長身も合わさって圧力的である。彼はクラークから草薙の剣を奪い取ると、掲げているんな角度から眺めた。

「うわ、すっげ、これモノホン？ 欲しいなあ、部長来てないしなんとかネコババできねえかなあ……無理か。俺ってば隠蔽できるほど人望もねーし……あーあ」

夢を見た後がつくりと肩を落とす。

「んで、クラークさん、あの大怪獣をどうにかしたいんだけど、麻酔銃とかあるっしょ？ 効くやつ出して。あれもウチで保護すっから」

「……くつ」

この十分後、怪物は麻酔によって眠りにつく。この後クラークは

天警側によつて刑事告訴され、一日にして有罪が認められ、投獄されることとなるのだが、それはまた別の話だ。

「ああ、君、これ管理しといてー。俺こつうのすぐなくすからさあ」

「え、自分でいいんすか？ アバウトすね」

「ははは、そう褒めるなよ」

アフロの男は草薙の剣を部下に渡すと、軽快に笑つた。そしてすぐさま首をばきりと鳴らす。

「残りのネズミでも捕まえるとすつか……特に、パンスト野郎は骨がありそうだぞ、と」

彼は気付かない。草薙の剣を手渡した部下が、ただの『変装』に過ぎなかつたということに。

瞬間、付近で爆発。爆風に弾かれ、男が「ぶえっ」と間抜けな声を出しながら転んだ。同時にいくつかの場所で爆発が起きた。闘技場に限らず、違法賭場全体が混乱に見舞われる。

「……めんどくせえ。巨大で封鎖もできねえしなあ……ま、いいか、適当にいこつ」

さして気にした様子もなく、男は立ち上がる。既にその場に、彼の部下はいなかつた。

「ざまあみるつす！」

天草太郎。そもそも彼はダンマルたちを見限り、単独で逃げるつもりで天警の衣装を奪つたはずだつた。「一度しか助けない」が彼のモットーなのだ。しかし幸運にも彼の単独逃走ルートがクラークのそれと重なつた。チャンス伺ううちに天警のリーダー格が現れ、クラークを制した。天草はこれをチャンスと認識し、死角を突いて爆破準備を整える。爆破して動揺を誘つた上で強奪するつもりだつたが、リーダー格のアバウトさが手伝い、順番が逆になつた。

結果、彼は草薙の剣を入手するに至る。賭場は混乱を極めており、客、あるいは天警に紛れての脱出は客観的に見ても容易と思われた。

ほくそ微笑む彼の行く手を遮る者はいない。

「やりやしたぜ……姉さん！」

天草太郎の、勝利宣言だった。こうなれば、もはや分け前を半々にする理由はない。

「ぐおおおお！」

「ええい、いちいち五月蠅い！」

「だって、銃弾！ 当たったら天国だぞ！」

「ここが天国じゃ！」

言い争うダンマルとフリーは、花鳥に次いで非常階段を登っていた。ここは人が少ない。エレベーターの凄まじい混み具合を見た彼らは、一気に上上がるべく、空いている階段ルートを選んだ。時々上から天警が襲ってきては、花鳥が舞うように斬り捨てる。狙っているためか、吹き出る血はほとんどない。五年無敗を誇る闘技王でありながら賞金稼ぎという、最強の男・花鳥が先導する限りは比較的安全なのだが、たまに流れ弾がダンマルの方角へ飛んできたりする。それをフリーがクナイで毎回ぎりぎりのタイミングで弾く。その繰り返しだった。

花鳥、フリー、ダンマル、安藤、ヒナ、ハカセの順で駆け抜けている。一番足が遅いのがハカセであり、彼はヒナ以上に体力がない。フォーメーションについての議論は交わされておらず、ただ必然的に体力順でこうなった。それほどまでに、切羽が詰まっていたのだ。「もうちょいや！ せやけど油断しんとき！」

花鳥が腹から声を出す。おう、と言い返すダンマルは、途中でヒナから奪い取った箱を乱暴に片手で抱えていた。フリーのケーキである。ヒナはハカセとともに観客席で右往左往した際、フリーのケーキをしっかりと手に取ったのだった。

「だって、フリーさん、とても楽しみにしているみたいでしたから……」

ヒナとフリー以外は「何を言っているんだこの子」状態だったが、

フーは「ようやった！」と満面の笑みを浮かべていた。女性同士通じるものがあるのだろう、と男性連中は理解した。

重そうに見えたためか、ダンマルがヒナからそれを取り上げた。それが数分前の話である。

「うん、うまい」

「な、勝手にウチのケーキをつまむな！」

流れ弾にわざとらしくぎゃーぎゃー騒いでいたダンマルだが、すぐにその状況にも慣れた。運動して腹が減ったためか、余裕そうな表情で勝手にフーのホールケーキを摘む。まだ半分以上残っていたが、形は結構酷い有様となっていた。一方で、フーは怒声を上げている。

「ちい、ぎょーさんきおるわ！ 気いつけい！」

花鳥が叫んだ。既に出口付近であり、それ故に天警で固められていたのだ。日本刀を把持したストッキング男に向けて、天警は躊躇なく銃の引き金を引く。

よりも早く、日本刀がその銃器を引き裂いた。袈裟斬り、薙ぎ、逆袈裟斬り。圧倒的な速度で放たれる連続的な斬撃は、その場に残像を残すほどだ。しかし、それでも等速で駆け抜けるには至らない。敵を斬るために減速し、停滞する。それで、追いつかれた。

「う、うわあああつ！」

「ハカセくん!？」

いつの間にか、下の階から天警が追ってきていたのだ。為す術もなく、ハカセが捕まる。

「く、ハカセ！」

ダンマルは即断する。手に持ったケーキの箱を、スナップを効かせて投げ放った。安藤の頭上を通り、ヒナの脇を逸れ、ハカセを捕まえた男の顔面に。は当たらず、見事なまでにケーキの部分が

ハカセの顔面に直撃した。さながらパイ投げである。

「ぶへえっ!？」

「ウチのケーキが！」

空気抵抗がある箱となれば、ダンマルのコントロールも狂う。ハカセは上体を大きく後ろへ反らし、天警の男とともに後転。そのまま地下二階のフロアに倒れ込んでしまった。「やべ」というダンマルの呟きは、しかし上のフロアで響いたマシンガンの音にかき消される。

「うーわ最悪や」

天警のリーダー格、アフロの男が、地下一階で待ち伏せていたのだった。

「ハ、ハカセくんが地下二階に！」

一瞬上を見たダンマルだが、ヒナの言葉に慌てて振り返る。既にそこにはハカセの姿がない。

「ええい、振り向くな、気を抜くな桶狭間弾丸！ 上におる奴、マシンガンを持つておるぞ！ 下手すれば死ぬ！ 死にたくなけば、目を凝らして己を守れ！ それが最優先じゃ！」

「けど！」

ハカセを置いてはいけない。ダンマルの視線がフーにそう告げた。

そんな時だった。

「拙者にお任せ！ 別のルートから行きやすぜ！ その代わりに、そちのアフロを頼みやす！」

颯爽と下の階から現れるのは、天警の水色和服に身を包んだ天草である。彼は階段から進行方向を変え、ハカセが連れて行かれたであろう、あるいは逃げたであろう地下二階フロアの方へと向かおうとした。ニカツと歯を見せながら、

「ハカセさんはきつと助けやす！ だから、ピクシーちゃんを頼みやすぜ！ これはガチで！」

と大きな声を上へ向けた。ダンマルと天草の目が合うと同時、マシンガンの流れ弾がヒナの頬を掠める。ダンマルはごくりと唾液を呑み込みながら、真剣な面持ちで大きく頷いた。

「信じるぞ！」

ダンマルの返答。それと同時に、しばらく無言だった少年　安藤が、一言「ちくしょう」と呟いた。まるで自分の無力さを呪うかのような、そんな表情で。

一方、ダンマルの遙か前方では、早くも勝敗が決していた。

「はっ……さすがパンスト仮面！　めんどくせーヤツだねえ！」

バラバラにされた二丁のマシンガンを投げ捨て、アフロの男が両手を挙げて後退する。

「当たり前や、一対一やったら負けへんし。てかパンスト仮面ちゃうし」

花鳥は自信を溢れさせる。彼は全弾を躲し、あるいは弾き、そうしてマシンガンを斬り捨てたのだ。彼はアフロに出会って直後に素早く真上に跳んだため、マシンガンの流れ弾は下にいるダンマルたちにはほとんど届かなかった。花鳥なりの配慮である。

彼がアフロの男を斬らなかつたことにも理由があつた。

天界において、一定階級以上の天警を殺すことは重罪になるのだ。そもそも、花鳥は天警を一人たりとも殺してはいない。血を最小限に抑える峰打ちだった。

「そうか。なら、一対一でなければどうかな……？　今こそ我が同胞の怨みを晴らそう……」

そこでさらにもう一人、偉そうな天警が現れる。外側に大きく跳ねた、肩ほどまである金色の髪。細身で長身、爽やかな二枚目の男。ダンマルに負けず劣らず、歯が白かった。

「私は心眼こころのまなこの京極尊きんごくのたかみ。いざ尋常に　参るッ！」

「あー、部長、これにはワケが……って聞いちゃいねえよ。まあ、いいか！」

二人の天警が、再度行く手を阻む。

花鳥を先頭に、ダンマルたちは螺旋階段の上で彼らに対峙した。

が、そこで不可解な出来事が起こる。

「む……こんな時に電話だと……？　え、局長!？」

京極と名乗った男が、焦った様子で電話に出る。すかさず花鳥が

斬りにかかったが、それをアフロ男が警棒のようなもので食い止めた。フーがクナイを構えたところで、

「……………分かりました。 退くぞ、キムタカ!」

「え、ええ!?! まじかい、部長! なんで!?!」

「局長の飼ってるウグイスが逃げ出した。……………命拾いしたようだな。パNSTご一行様」

それを聞いて舌打ちするアフロ男。リーダー格の天警二人が、退き始めた。

「誰がパNSTご一行だ! 俺たちはAKB!」

「AKB…………?」

「そうだ! 明るい心暴発!」

「熱い気持ち爆発じゃなかったか?」

フーが冷静に言う。

「……………どうでもいい。とにかく、この場は預けよう……………行くぞキムタカ!」

「え、あ、はい、部長!」

去っていく二人。こうして、ダンマルたちは無事に地上へと逃げ延びた。

「それがつすね……………いなかっただつす……………いたのは、白いスーツを着た物凄いイケメンだけでして……………ハカセさんと思われる人は、いなかっただつす……………天警すらいなかっただつす」

落ち合うと予め決めていた場所、駅前でダンマルたちに合流した天草が言ったのは、それだけだった。大きな荷物を抱えた彼は一言、申し訳ないだけ言ってすぐに去っていった。

「イケメンか……………ハカセのはずないしなあ」

「戻って探すのは不可能じゃぞ? 既に天警によつて管理されておる」

「不自然やなあ。なんでもその占拠は継続やんに、僕らのこと逃がしたんやろ?」

「さあな……」

ダンマルたちは唸った。バラけた場合の集合場所は駅前である。結局、ここにいればハカセがそのうちやって来るかもしれない、という線で落ち着いた。

「しっかしギャングか。自分らがそないなぶっそうなもんになつたとはなあ……ええこと聞いたわ。ほんじゃま、行くわ。君らに懸賞金でも懸かったら、そんな時はよろしゅう」

微笑みを残して花鳥も立ち去った。彼は既にストッキングを脱いでいる。

「おう、よろしく！」

「馬鹿が。あれはの、懸賞金が懸かり次第敵同士になる、という意味でのよろしくじゃ」
「うげ……」

その日。結局、ハカセは現れなかった。

漫画喫茶の二人部屋。ダンマルはふわふわ髪の少年、安藤とともに寝転がっていた。助けられたことによる感謝から、彼は安藤に漫画喫茶代を奢って貰ったのである。

数時間前、ダンマルは、静かにくつついてきていた寡黙な少年安藤に対し、別れを告げようとしたのだが、「帰りたくないです」という、女性に言われれば喜んだであろう台詞を彼が突如として放ったため、結局一緒に過ごす形となったのだ。

「あーあ、携帯電話欲しいな。したらハカセだってさっさと見つかるのに」

「そうですねえー。僕も自宅に置きっぱなしですよー。ないと不便ですー！」

ダンマルの独り言に、律儀に付き合う安藤。

「なあ、お前はなんで、あんな闘技場的なアレに出ようと思ったんだ？」

「……………明後日、姉の誕生日だったんですよ。黙ってましたが、

僕は悪霊です。本来なら貧乏なんです。けれど、姉が……お姉ちゃんが、僕のために稼いでくれてるんです。だから僕は、恩返しがしたくて……それで」

俯きながら堪える安藤。ダンマルの表情に真剣さが増した。

「恩返しつつたつてお前……そんなの手作りケーキとかでいいじゃん」

「それじゃあダメです……お姉ちゃんは、お姉ちゃんのままです。僕のせいで、昔と変わってしまったんですよ。昔は理知的で、達観していたんですが、今は切羽詰まって必死な感じなんです。僕が悪霊だから、弱いから、情けないから、僕を守るために、お姉ちゃんは自分の手を汚して……本来は貴霊だったのに、悪霊に階級を下げられてしまって。もう嫌なんです。僕は証明したい。僕は男です。自分のことは自分で守れるって……だから、誕生日プレゼントは、」

「……自分の強さの証を、プレゼントしたかったと」

「そういうことです！」

なるほど、とダンマルは頷いた。

「加えて、お姉ちゃんは刀フェチなんですよ。僕を一番に考えるために恋愛を捨てたんです。その代わり、よく分らないことに、何故だか刀を愛するようになってしまいました。お姉ちゃん、多分壊れてるんですよ、いろいろと……。草薙の剣を一目でも見てみたいって、いつも言っていました。だから、僕は……喜ぶお姉ちゃんの顔が見られれば、一石二鳥かなって」

「この欲張り！」

「ふええ、ごめんなさいい」

いじめられっ子のように涙目になる安藤。ううむ、とダンマルは唸る。

「お前はお姉ちゃんに、刀と恋愛をさせたいのか？」

「え！？ いや、そんなことないですよ、普通に恋愛して欲しいですよー！」

「じゃあ、刀なんか渡したら逆効果なんじゃないのか？ 草薙ラブ

になりそうだぞ」

「……………あ……………そうですね……………」

安藤は口を開いたまま固まってしまった。

「ちなみにお姉ちゃん美人？　どんな子？」

「美人ですよ！　ショートカットでお洒落です。性格は、そうですね、豪快です。スイカ割りをチョップでこなしたり、痴漢にあったらボコボコにしたり……………ああ、素敵」

「よかろう。ならばこの俺がお姉ちゃんの彼氏になってあげよう！」
「……………はい？」

ダンマルの意味不明な提案に、首を傾げる安藤。

「お前は強さの証をプレゼント。俺は恋愛感情をプレゼント。どうだ？」

「どうだって言われても……………え？」

「昔のお姉ちゃんに戻ってきて欲しいんだろ！」

「は、はい」

「だったら俺に任せておけ。こう見えて、俺は童貞だからな。こういうのは得意なんだ」

疲れと眠気のためか、ダンマルの言っていることは大分破綻していた。

「あ、でも、誕生日は明後日か……………。じゃあ無理かもな。俺たちは五千万集めなきゃならないから、多分明日明後日は銀行強盗とかだぜ。お前のお姉ちゃんに会ってる暇はないかも」

ハカセの存在を完全に忘却しながら、ダンマルが申し訳なさそうな顔をする。

「いや、それは全然いいんですけど……………って、銀行強盗！？」

「ああ。俺たちはギャングだからな」

にかつと歯を見せるダンマル。どう見てもギャングには見えないえくぼがそこにあった。

「そ……………そうだったんですか！　銀行強盗……………ギャング……………！　あの、お願いがあります」

「ん？」

「僕も連れて行ってください！ 少しの間だけ、チームに加えてください！」

安藤は起き上がり、ここが漫画喫茶だっていうことを考慮せずに大きな声を発した。

「でも、お前子ども……」

「僕はこう見えて、現世時代から含めて七十歳です」

「じ、じじいじゃん！」

「……とにかく、ついていきますからね。僕のお姉ちゃんも、ギャングなんですよ！」

だから、と安藤は真剣な眼差しをダンマルに向けて、言った。

「ギャングとして、僕はお姉ちゃん以上の悪さに挑戦したいんです！」

そうすれば、きつと認めて貰えるから。

安藤の意志はまるで揺らがなかった。

「……いいぜ。その代わり、お前一番下っ端だからな！」

「望むところです」

ダンマルは一切の相談なく、決定する。安藤はにっこりと無邪気に微笑んだ。

「ちなみにお姉ちゃんのギャングは何ていうの？」

「名前ですか？ えーっと、いくつか細かい支部があって、お姉ちゃん

は三毛鼻第三支部長なんですけど……組織自体の名前は……え

ーっと、何だったかな？ ……あ、思い出しました」

確か、と安藤は続けた。

「地獄変です！」

「あんたらさ。あたしが地獄変だって知っての狼藉なワケ？」

パツツンに整えられた金髪のショートカット。地獄変第三支部長にして、安藤の姉。

通称『砂かけお姉さん』が、十数人に渡る男たちの山を作り、背

にヒールを押しつけていた。

「あ、ぐあ……」

「情けないねえ……これだから弱い男は……。まったく、刀みたいに鋭く生きられないのかしら」

ヒュンヒュン、と二刀流の日本刀を振り回す。切っ先が男たちの頬を擦り、そのために小さな悲鳴が上がった。『砂かけお姉さん』は、そんな様子を見下しながら高々に笑う。

「あはははははっ！ でも良いこと聞いちゃった。あのクラーク一派が壊滅……ねえ？ これはちよつとばかり、稼がせて貰わないと損ねえ？ そう思うでしょ？」

真つ赤なルージユが闇夜に揺らめく。ひたすら頷く男たちに顔を近付けながら、彼女は愉しげに、死を宣告した。

「あんたらが持っている天啓、全額あたしによこしなさい。さもなきや砂で生き埋めにするわよ？」

. . . 3

4

「ふむ……よかるう。ウチに異論はない。安藤翔太、素晴らしい心意気じゃ！」

翌日、早朝六時半。二十四時間営業のナクドマルド内で、フーは反対せずに深々と頷いた。漫画喫茶宿泊組の朝は早い。赤字であるヒナの宿泊費はフーが支払い、全員で冷えこむ朝の三毛鼻を闊歩した。ゆつくり話せる場所を探そうということで、現在彼らはここにいる。

そこでダンマルが説明をした。一先ずハカセの搜索は置いて、ヒナのための五千万全をどうにかしよう、という話。そして、安藤が草薙を欲していた経緯と、そんな安藤をAKBの一員として一時的に迎え入れたい、という話。

そして意外にも、そんなダンマルの提案をフーはあっさりと受け

入れた。一方ヒナは、安藤を加えることに対し、子どもは少し危ないのではないかと躊躇したが、安藤の熱心な立ち振る舞いと、年齢の自己申告によって額かざるを得なくなった。

そうして、安藤翔太がAKBに加わった。

「よろしくお願いしまーす！」

続けて、ダンマルは五千万全を手に入れる方法として、銀行強盗の提案をする。

「だって、ギャングと言ったら強盗だろ？ それに、五千万の賞金首になるんだったら、やっぱり悪いことをしなきゃな。殺人は絶対パスだけど、強盗くらいなら、さ？」

ダンマルは元々不真面目な生徒であり、倫理観は普通以上に脆い。大好きな野球をあっさり捨ててバットを武器にするような、さっぱりとした性格だ。切羽が詰まった現状において、彼の善悪のボーダーは曖昧になっていた。銀行強盗はセーフ。それが今の、彼の倫理観だった。

「……そうじゃの。菊川雛瀬を生かすなら、大きなことを為す必要はあるじゃろう。結局草薙も手に入らんかった。……ふむ、それなら、銀行は銀行でも、私設天啓銀行はどうじゃ？」

そこでフーが提案する。昨晚ケーキを失ったことがショックだったのか、彼女はシェイクを三種類全部トレイの上に並べていた。豪華思考はさすが貴霊。今はストロベリーを持っている。

「私設……？」

「そうじゃ。もつといえ、闇金融としての側面を持った私設天啓銀行じゃ。預ければ利益還元でお得、という餌を用いて天啓をかき集め、銀行としてそれらを私的に管理した上で、それをバンクとし、他の者に天啓を貸し与える。無論、法外な利子つきでの」

「よく分からんけど、日本の闇金に近い感じ？」

「うむ。彼らは天啓を苦手とする故、通報される心配もないじゃろう。悪を以て悪を裁く という感じかの。どうじゃ？ 違法の銀行なら襲っても大して文句はなかるう？」

「採用！」

顧客からすれば文句が出そうな話ではあるが、ダンマルには関係がなかった。

「となると問題は、如何にしてそ奴らを見つけ出し、出し抜くかということじゃが……」

「あの、それでしたら……」

制服を着たヒナが、間に合わせのポシエットから名刺の束を取り出し、そのうち一枚を抜く。

「多分、これとかじゃないですかね？」

彼女が前のめりな姿勢で掲げた名刺には、『いつもにこにこ、天啓貸し出しマッスル』と書かれていた。住所は三毛鼻であり、ダンマルたちがいる近辺である。

会社の名前は『にこにこはっぴーローン』。完全に怪しかった。

「あつ、その会社、確かクラーク傘下の傘下ですよー」

顔を名刺に近付け目を細めながら、安藤がぼそりと呟いた。

「クラークって……ああ、あいつか。そっぴりやアイツ捕まっただんかな？」

「安藤翔太。君は何故そんなことを知っておる？」

同時に疑問を口にするダンマルとフリー。安藤は後者の方にだけ答えた。

「お姉ちゃ……姉がよく、クラーク傘下を狙っていたからです。クラークは絶対に天警に通報しませんし、傘下の会社にもそれを強制しています。本気で抗争するならば、やっぱり天警は邪魔ですからね。ですから天啓を組織的にごっそり頂く場合は、基本的にクラークのようなヤクザ系、マフィア系の筋を狙うんです。もともと、とても危ない橋なんで絶対に顔だけは隠します。捕まったら潔く自害し、チームのことは語りません。それが『地獄変』の鉄の掟です！」

「……なるほど。把握した。故に弟である君もそれらに詳しいということじゃな」

「そっぴりということですよー」

知識が披露できたのが嬉しかったのか、満足げに安藤は頷いた。

「ふむ、クラークの違法賭場が昨日あんなことになったんじゃ。今ならその傘下もガタガタじゃろう。狙うなら丁度いいかもしれんな。どうする、リーダー？」

「五千万くらい奪えるかな？」

「おそろく可能じゃ」

「なら、やらない理由はない！」

リーダーと言われたことに対し、ダンマルはツツコミは入れない。彼は自分のことを、元よりリーダーであると思いついていたからだ。

「その闇金を、強盗仕掛けてぶっ潰す！ 熱い気持ち爆発！ A K

B！ うすー！」

ダンマルの一方的な円陣によって、本日の方針が定まった。

「ところで……その腹の膨らみはなんじゃ、桶狭間弾丸？」

「あ、いや、これは……」

「ああ、それはダンマルさんが昨日漫画喫茶でパクったエロ……」

「さて、準備開始だ！ バット買いにいこうぞ！」

ダンマルは目を泳がせながら勢いよく立ち上がった。するとお腹から、どさりと卑猥な漫画が大量に落ちる。口を開けて呆然とする。フー。あちゃー、と額を押さえる安藤。

ダンマルの顔がみるみる青ざめていく。

「……………最低ですね、ダンマルさん」

そう言いつつも、ヒナの表情はどこか楽しげだった。

「ったくめんどくせえ……………」

ポロシャツにジーパンと、ラフな格好に身を包む天警のアフロ男が、三毛鼻の裏路地を不機嫌そうに歩いている。木村隆也警部きむらたかやは、部長、京極尊の命により、クラーク傘下を一網打尽にすべく動いていた。とはいえ、本日は観察とマーキングが彼の任務である。ネズミを逃げ残さないように関連図を生成し、後日行われる一斉逮捕を

円滑にするという狙いがあった。

「つまんねえ仕事……」

独りごちる木村。うあー、とだれつつも、職務は職務なので歩き続ける。

しばらくすると、ぴたりと彼の足が止まった。地図とビルの住所を見比べ、にかつと笑う。

「えーっと、『はいぱーハートフル金融』……ここだな」

彼は欠伸をしながら階段を登っていった。時刻は午前十一時、本日也快晴である。

ダンマルは結局一人で漫画喫茶へ戻り、漫画を返しに向かった。

その後スポーツ用品店等に寄って、フーの天啓を使って武器と衣装を調達する。「いくら持っているんだ」というダンマルからの質問に対し、フーは「さすがに五千万は持ってないぞ」と答えた。

やがて、準備は整う。

「や、やつぱり……恥ずかしいですコレ……」

顔を朱に染めるヒナ。現在、ダンマル、フー、ヒナ、安藤の四人は、何故だか体操服を着込んでいた。フーとヒナに関しては、既に現世では見ることの叶わないブルマ姿である。

「ギヤングと言ったらカラーの統一だろ？ いや、本当は野球のユニフォームが良かったんだけどさ、なんか滅茶苦茶高かったし……まあ、スポーツ用品店で一番安かったんだしさ？」

「そうですねっ！ っていうか別にスポーツ用品店で揃える必要ないですっ！」

「まあ、そう言うな。ウチは別に嫌ではないぞ。初めてのファッションは大歓迎じゃ。それになにより、とても動きやすい。いいではないか、どうせ顔は見えておらんのだじゃ」

フーがヒナに一瞥をくれる。彼女の顔は、水泳帽と水中ゴーグルにて覆われていた。

今回は準備の大半を結局スポーツ用品店で済ませたため、顔を隠

すアイテムももれなく水中仕様となっている。特にゴーグルは、サングラスより外れにくいというメリットが大きかった。

「うつつ……分かりました……けど……」

ヒナがしょんぼり肩を落とす。彼女は恥ずかしさのためか、未だに水中ゴーグルと水泳帽を装着出来ずにいた。なお、人目を気にしないダンマル、世間知らずのフー、素直な安藤に関しては、人通りのある駅前においてもばっちり装備中である。

「大体、それもこれも全部ウチが立て替えたんじゃ。文句を言うでないぞ。特にダンマル、君にはきっちり返済して貰うからのう。約束じゃぞ？」

「任せろ。俺は生まれてこのかた、約束を守ったことがない」

ダンマルは笑顔で最低発言をした。

「まったく……君という男は！」

「で、でもこれ斬新ですよ。地獄変でも顔は隠しますが、さすがにゴーグルは盲点でしたよ」

険悪な雰囲気になりそうだったためか、慌てて安藤が話題を変える。フーが興味を示した。

「地獄変、か。そ奴らもぎゃんぐなのじゃったな？ 如何にして顔を隠しておるのじゃ？」

それはですね、と安藤が答える。

「フルフェイスですよ。そして、黒のライダースジャケットがチームカラーです」

「姉さん！ 忘れてやまず、ヘルメット！」

「あー、わり。あんがと、太郎」

「いえいえ！ っていうか姉さん、あれっすか？ 寝不足っすか？」

「うん、昨日ちよつと踏みすぎたわ。……さて、そろそろ行くわよ。あんたも準備はいいの？」

「ばっちりですぜ！」

天草太郎は黒のライダースジャケットを羽織り、フルフェイスを

くるくると回していた。筋肉隆々の身体は、サイズが小さめのジャケットによつてぴっちり押さえつけられている。

同じような姿をした男たちが、二人の他に四名。低重音とともにバイクを唸らせ、リーダーである女性 『砂かけお姉さん』と、天草を急かしていた。

「よし。いつも通り行くわよ、『大黒天』」

「……………分かってる。いちいちオレに命令しないで欲しいものだな、砂かけ」

「はいはい、分かった分かった。太郎……………じゃなかった、大黒天。先導よろしくね？」

「……………食えない女だ」

天草は大型バイクに跨り、グリップを握りしめる。そうして、爆発的に飛び出した。

「あーあ……………まったく。人格が変わるつても難儀なことだね……………太郎のヤツ」

性格が豹変した舎弟、天草 大黒天の背を見つめながら、砂かけはため息を吐いた。

すぐに彼女は首を横に振り、

「行くよッ！」

地獄変の面々を引き連れて、天草に続くのだった。

黒色を是とするブラック・ギヤング『地獄変』。

彼女たちが向かう先は 。

「ここか……………にこにこはっぴーローン」

ダンマルたちは目的地へと辿り着く。スラム街が如く廃れた街並みに立っていた。

・ 4

・ 5

・エピソード

・6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8918z/>

天界ギャング

2011年12月28日00時52分発行